



日本認知心理学会 第2回大会プログラム

2004年5月8-9日 同志社大学

ご挨拶

風薫る皐月の、緑の美しい季節となりました。会員ならびに関係各位におかれましてはご健勝のことと拝察申し上げます。本年度も早いもので、5月8日から9日までの2日間、日本認知心理学会第2回大会を迎えることとなりました。プログラムの作成に思いのほか時間がかかりましたが、会員の皆様のご協力により完成することができました。感謝申し上げます。

日本認知心理学会第2回大会はご案内のように、同志社大学新大会館（仮称）で開催される事となりました。この建物は落成式を終えたばかりの、赤いレンガ作りの建物で、会員の皆様には心地良く参加していただけるものと期待しております。

さて大会の内容ですが、発表件数は口頭発表、ポスター発表を含め130件を超え、テーマも多岐にわたりますが、認知心理学の最前線を形成する興味深い内容で、主催者としても皆様の日頃の研究が開陳されることを心待ちにしております。またシンポジウムも「情報を引き出す面接法」、「感情から認知への架け橋～曖昧なものを明確化するための多様なアプローチ～」、「フィールドとしての博物館・美術館」、「Actology: Where Language, Cognition, and Action Meet 言語と認知と行為が会うところ」、「独創賞」、「認知の発生を考える」と、興味深くしかも独創的な企画を用意していただきました。企画者関係各位に感謝申し上げます。また今大会では特別講演として、ワシントン大学の Hunter Hoffman 博士を招待することができました。VRを利用した認知心理学の研究についてご講演いただくことになりました。多くの会員の方のご来場をお待ちしております。

本年度も昨年度の大会同様に優秀な発表を顕彰する企画がございます。会員の方におかれましてはこの企画にも積極的にご参加いただけますようお願い申し上げます。

本年度の大会は去年の大会から1年にも満たない期間での開催となりました。そのため十分な準備の時間がとれず、会員の皆様にはなにかとご迷惑をおかけする事もあると存じますが、皆様のご理解とご協力を得て有意義な大会としたい所存です。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、大会初日の夕べには懇親会も用意させていただきました。こちらの方にもご参加いただき、ご歓談いただければ幸いです。では、京都の大会をお楽しみください。

日本認知心理学会第2回大会
大会準備委員長
井上智義
プログラム委員長
巖島行雄

※注:同一枠内であっても,終了時間が異なる場合があります。詳細は各ページをご参照ください。

| 5/8 (土) | 9:00 | 10:00-12:00 | 12:00-13:20 | 13:20-15:20 | 15:40-17:40 |
|-------------------------|------|-----------------------|-------------|--|----------------------------|
| B1F大ホール (シンポ) | | シンポジウム1 情報を引き出す面接法 | 昼休み | シンポジウム2 感情から認知への架け橋 曖昧なものを明確化するための多様なアプローチ | シンポジウム3 フィールドとしての博物館・美術 |
| 部屋1[KMB203] (口頭・シンポ) | | 口頭発表1 空間・イメージ | 昼休み | 口頭発表2 視覚認知・注意 | シンポジウム4 言語と認知と行為が出会うところ |
| 会議室-地A (ポスター) | | ポスター1 視知覚・聴知覚・注意 | 昼休み | ポスター2 身体・フィールド・日常認知 | ポスター3 記憶 |

受付開始

理事会
部屋2
[KMB211]

| 5/9 (日) | 9:00 | 10:00-12:00 | 12:00-13:20 | 13:20-15:20 | 15:40-17:40 |
|---------------------|------|----------------------|-------------|---------------------|----------------------|
| B1F大ホール (講演・シンポ) | | シンポジウム5 独創賞シンポジウム | 総会 | 特別講演 Dr. Hoffman | シンポジウム6 認知の発生を考える |
| 部屋1[KMB203] (口頭) | | 口頭発表3 記憶 | 昼休み | 口頭発表5 感情・自己 | 口頭発表6 コミュニケーション |
| 部屋2[KMB211] (口頭) | | 口頭発表4 言語・聴知覚 | 昼休み | | 口頭発表7 脳・ニューロ |
| 会議室-地A (ポスター) | | ポスター4 顔・言語・概念 | 昼休み | | |

受付開始

大会参加者へのご案内

1. 大会へは、同志社大学新大会会館（寒梅館）で行います。会場へのアクセスは、案内図をご参照ください。
2. 新大会会館（寒梅館）正面入り口に受付があります。会期中の受付開始時刻は午前9時です。
3. 大会参加費ならびに関連費用は次のようになっています。まだ納入されていない方は受付でお支払いください。

参加費

一般会員 : 5,000 円

学生会員 : 3,000 円

臨時会員 : 4,000 円

非会員（一般）: 8,000 円

非会員（学生）: 4,000 円

論文集費 2,000 円

懇親会費 4,000 円

4. 会期中は参加章を衣服の目のつくところにお付けください。
5. クロークは地下1階のポスター会場横に設けてあります。8日（土）、9日（日）とも午前9時より利用できます。
6. 会場での呼び出しは原則として行いません。受付付近に伝言版を用意いたしますのでご利用ください。お済になった伝言用紙は直ちにお取り外してください。
7. 休憩は地階会議室（ポスター発表会場）横ロビーをご利用下さい。
8. お食事は両日とも、レストランに営業をお願いしています。また、周辺の食堂等の案内も用意する予定です。
9. 会場内での駐車はできませんので、公共交通機関をご利用ください。

発表者へのご案内

1. 大会受付の効率化のため、できるだけ大会1週間前まで（4月30日までに）大会参加費および論文集費をお振込いただきますよう、お願いいたします。なお、参加費には論文集代金が含まれておりません。印刷された論文集をご希望の方は必ず、参加費と共に論文集費をお支払いください。振込方法については、学会HPをご参照ください。

2. 口頭発表の方の発表時間は 12 分、質疑応答時間は 3 分です。
全員の発表が終了した後に 15 分の討論時間が設けてあります。口頭発表で利用できる機器は、プロジェクター（プレゼンテーション用のファイルは複数の媒体でご準備ください）もしくは OHP です。それ以外の機器をご利用希望の方は、できるだけ早く事務局までご連絡ください。発表者の交代ができるだけスムーズに行われるよう、ご協力ください。
3. ポスター発表の方は、一人あたり縦 180cm × 横 90cm パネルが利用可能です。2m 程度はなれたところからでも読めるように、ポスターを作製してください。ポスターをパネルに貼るためのピンは大会事務局で準備します。
なお、各ポスターセッションの前半 60 分は奇数番号の方の在籍責任時間、後半 60 分は偶数番号の方の在籍責任時間となります。在籍責任時間中は、ポスターを見にきた方との質疑応答に答えられるよう、必ず自分のポスターの掲示場所にて待機してください。
4. ポスター発表、口頭発表ともに、大会発表賞の対象となります。

特別講演

「 Virtual Reality: A New Way of Treating Pain and Fear 」 バーチャルリアリティ：苦痛や恐怖を低減する新しい手段

5月9日(日) 13:20～14:50 大ホール

講演者：Hunter Hoffman, Ph.D

Director of the Analgesia Research Center, Human Interface Technology Laboratory,
University of Washington, Seattle

司会：巖島行雄(日本大学)

講演の内容

In the science fiction thriller “the Matrix” Keanu Reeves “plugged in” to a virtual world experience. His body was in one place, lying in a reclining chair, while he (i.e., his mind) was in another place. During wound care at Harborview Burn Center in Seattle, conscious patients (especially children) would love to go somewhere else while doctors and nurses work on their burn wounds. The majority of severe burn patients experience severe to excruciating pain during daily wound care, despite aggressive use of opioid painkillers.

In the present talk, I will present results from several published clinical studies exploring the use of virtual reality for reducing pain during burn wound care in severe burn patients. I will also present results from controlled laboratory experiments investigating what happens in the brain when pain is reduced by virtual reality (e.g., results from our new fMRI study measuring the influence of virtual reality on pain-related brain activity).

And I will show short video clips describing two of my other research projects using virtual reality to treat fear of spiders (phobia), and another project using virtual reality for therapy to help reduce symptoms of Post-Traumatic Stress Disorder from Sept 11th. See www.vrpain.com for more information and downloadable manuscripts.

主な著書・論文

Garcia-Palacios, A., [Hoffman, H. G.](#), Carlin, C., Furness, T.A. III, Botella-Arbona, (2002). Virtual reality in the treatment of spider phobia: A controlled study. *Behaviour Research and Therapy*, 40:9:983-993.

[Hoffman HG](#), Richards T, Coda B, Richards A, Sharar SR. The Illusion of Presence in Immersive Virtual Reality during an fMRI Brain Scan. *Cyberpsychol Behav.* 2003 Apr;6(2):127-31.

[Hoffman, H.G.](#), Richards, T., Magula, J., Seibel, E.J., Hayes, C., Mathis, M., Sharar, S.R., and Maravilla, K. (2003). A magnet-friendly virtual reality fiberoptic image delivery system. *CyberPsychology and Behavior*, 6:645-8.

Hoffman, H.G. , Richards, T.L., Sharar,S.R., Bills, A.R., Blough, D., Richards, A.L, Coda B. (in press).
Modulation of thermal pain-related brain activity with virtual reality: evidence from fMRI. NeuroReport.

シンポジウム 1

「情報を引き出す面接法」

5月8日(土) 10:00~12:00

企画者：井上智義（同志社大学）・仲真紀子（北海道大学）

司会者：仲真紀子（北海道大学）

話題提供者

井上智義（同志社大学）

「高齢者から研究者が聞き出す」

小松孝至（大阪教育大学）

「幼児から母親が聞き出す」

越智啓太（東京家政大学）

「目撃者から捜査官が聞き出す」

小林哲郎（京都大学）

「クライアントから臨床家が聞き出す」

指定討論者

齋藤洋典（名古屋大学）

原田悦子（法政大学）

企画概要

本シンポジウムでは、相手から情報を聞き出す技について議論する。さまざまな領域の研究や実践で用いられる面接の特徴、あるいは、日常的に交わされる巧みな対話例などが紹介される予定である。そして、聞き出そうとしている情報の性質や相手の属性によって変化すると考えられる、情報収集のための具体的な工夫について追究する。さらに、一般的に情報収集時に奨励されるべき態度と控えるべき発言など、すべての面接やパーソナルコミュニケーションに共通のものがあるのかについても、議論をすすめていく。

人間の記憶から多くの正確な情報を聞き出すことに適した方法はいかなるものなのか、また、円滑なパーソナルコミュニケーションには、どのようなことが必要なのかを明らかにしていく。人の口から得られる情報が、実生活の大切な場面で、あるいは、心理学の研究において、どのように役立つのか、話題提供を受ける領域以外でのトピックも幅広く扱っていくことにする。

シンポジウム 2

「感情から認知への架け橋 ～曖昧なものを明確化するための多様なアプローチ～」

5月8日(土) 13:20～15:20

企画・司会者：谷口高士(大阪学院大学)

話題提供者

入江清五(高雄病院)

「膝伸展補助付膝装具(KURG)開発の紹介」

鳥居(井上)さくら(元ポーラ化成工業株式会社研究所)

「笑顔の形態的特徴による印象の変化」

木村竜也(関西大学)

「インタビューによる在日外国人のアイデンティティ研究」

指定討論者

余語真夫(同志社大学)

企画概要

認知心理学研究の中で感情や自己を扱う場合、どうしてもそれらを認知実験のパラダイムに取り込もうと考えがちである。G.H.Bowerをはじめとする認知-感情研究は、まさに感情を認知的情報と同レベルのパラメータにすることによって、多くの研究者が避けて通ってきた感情の問題を認知の枠組みでとらえ直し、成果を生んできた。しかし、そうした成功の一方で、蒸留水のように抽象化・単純化されたことにより、本来より生々しく豊饒であるはずの感情の“hot”な現実感が喪失されつつあるように思われる。そこで、この企画では、リハビリテーションの指導と補助器具開発の実践、表情からの感情の読み取りに関する研究、インタビューによる在日外国人のアイデンティティ研究という、異なる立場から直接間接に感情に関わる実践や研究をされている3名に、アプローチ方法、工夫、成果の報告をお願いした。現実場面で何が起こり、何ができ、何が問題となるのかについての問題提起を行っていただき、それを通じて、認知心理学は感情の問題にどのように向かい合っていくことができるのかを考えるきっかけにしたい。

シンポジウム 3

「フィールドとしての博物館・美術館」

5月8日(土) 15:40～17:40

企画・司会者：吉村浩一（法政大学）・真鍋 真（国立科学博物館）

話題提供者

碓 京子（林原自然科学博物館）

「エドゥケーターから捉えた博物館教育の問題点分析と認知心理学との協力」

関口洋美（武蔵野情報学園）

「科博恐竜館と北九州自然史・歴史博物館での調査に基づく来館者調査の問題点と可能性」

伏見清香（愛知文教女子短期大学）

「名古屋市美術館での PDA を用いた展示解説実験に基づく美術館での知識伝達の位置づけ」

指定討論者

時津裕子（九州大学大学院）

亀谷誓一（麻布大学大学院）

企画概要

特定の現場に特化した共同研究を開拓していくことは、認知心理学のこれからの研究方向として有望だと思う。知識や感性を来館者に伝達すべき博物館や美術館をそうしたフィールドの1つと位置づけ、現状の問題点の分析と望ましい姿の提案、そしてそれを実現するための方法を探っていく。本シンポジウムでは、企画者らが携わっている、国立科学博物館での移動体通信を用いた音声ガイドシステムの開発研究を中心に、わが国でのさまざまな取り組みを検討し、これからの研究協力の広がりを目指したい。なお、昨年大会で、博物館・美術館をテーマとして優秀発表賞を受けた2名には、指定討論者として参加を求める。

シンポジウム4

「Actology : Where Language, Cognition, and Action Meet 言語と認知と行為が出会うところ」

5月8日（土） 15:40～17:40

企画・司会者：齋藤洋典（名古屋大学 大学院情報科学研究科）

話題提供者

伝 康晴（千葉大学 文学部 行動科学科）

白石知子（愛知県立看護大学 看護学部）

細馬宏通（滋賀県立大学 人間文化学部）

村上和人（愛知県立大学 情報科学部 情報システム学科）

企画概要：

知ることと行うことの合一を目指す学理は、歴史に多く認められる。それらは両者が離反しやすく、統合しがたい性質を持つことを知る古人の叡智のあらわれである。知行合一は高邁な精神の理想としての到達点であるだけではない。それは日常的な生活の出発点でもある。

本シンポジウムでは、行為につながる知識処理と、行為が促す知識処理とに相互作用を認め、そうした知識と行為をめぐる総合的な知的活動を、仮に Actology と呼び、言語と行為、話し手と聞き手などの既存の区分を「つなぐ心のはたらき」とは何かを問い、そのとらえ方について考えてみたい。

なぜなら、人が考えるところを述べ、範を示すのは、理解を深めるためであり、それによって行為を促すのは、自ら実践できることに限りがあるからである。また、人の説くところを聞き、理解を深めるのは、行うためであり、しかしなお考えをめぐらすのは、やはり実践できることに限りがあるからである。

言語とジェスチャー、理解と実践、話し手と聞き手、人とロボットの接点に知行合一の乖離をつなぐ新たな知識処理の可能性を探る。

シンポジウム 5 学会企画

「独創賞」

5月9日(日) 10:00~12:00

企画・司会者：高野陽太郎（東京大学大学院人文社会系研究科；独創賞選考委員会委員長）

話題提供者

「独創的な研究とは何か？」

波多野諄余夫（放送大学）

市川伸一（東京大学大学院教育学研究科）

市原茂（東京都立大学人文学部；独創賞選考委員）

仲真紀子（北海道大学大学院文学研究科；独創賞選考委員）

企画概要

日本認知心理学会では、「独創賞」という賞を設けることになりました。この賞は、独創的な研究にスポットライトをあてることによって、独創的な研究を支援しようというものです。日本の認知心理学界からより多くの独創的な研究が生み出されるようになれば、という願いをこめて創設しました。このシンポジウムでは、最初に、独創賞選考委員会から、理事会で決定した選考の基本方針や手続きについてご説明をいたします。

続いて独創的研究についてのパネルディスカッションをおこないます。海外で行われた著名な研究の中から、各パネラーが最も独創的だと考える研究を選んで紹介し、なぜ独創的だと考えるのかを説明します。

パネラーおよびフロアの参加者のあいだで、「独創的研究」の選定やその理由について意見交換を行い、独創的な研究とはどのようなものなのかを考えてみたいと思います。

シンポジウム 6

「認知の発生を考える」

5月9日(日) 15:40~17:40

企画・司会者：川口潤（名古屋大学環境学研究科）

話題提供者

川合伸幸（名古屋大学情報科学研究科）

「系統発生的側面：チンパンジーの胎児期の記憶」

遠藤利彦（京都大学教育学研究科）

「個体発生的側面：発達心理学の理論的側面から」

高橋雅治（旭川医科大学医学部）

「認知研究の新しい手法：光トポグラフィー」

指定討論者

泰羅雅登（日本大学総合科学研究所）

企画概要

近年、認知心理学の分野においては、認知機能の進化や発生の問題が注目されている。たとえば、記憶に関しては、「思い出」の記憶であるエピソード記憶が人間以外の動物においてみられるのかどうかといった議論が盛んとなってきている(e.g., エピソード様記憶, episodic-like memory)。このような関心は、単に認知メカニズムの詳細な記述にとどまらず、人間が持っている認知機能の意味を考える上できわめて興味深いものであり、今後大きな展開が期待される問題である。そこで、本シンポジウムでは、このような問題に対して、実証的な形でどこまでアプローチできるのかを、系統発生、個体発生的側面からの議論、さらに脳活動に関する新しい実証的研究手法に関する議論をもとに、考えてみたい。

研究発表

は非会員

口頭発表

5月8日(土) 10:00 ~ 11:45 口頭1 空間・イメージ (部屋1 KMB203)

座長 : 高野陽太郎, 吉田千里

- | | | | |
|--------|-------------|--|----------------------|
| o1-01 | 10:00-10:15 | 外的な地図の歪みと認知地図・方位感覚の関係 法政大学社会学部 法政大学社会学部 | 新関亮太 原田悦子 |
| o1-02 | 10:15-10:30 | 鏡映反転 : 高野説と Gregory 説の比較検証 東京大学文学部 | 高野陽太郎 |
| o1-03 | 10:30-10:45 | 身体の回転による身体中心的空間表現の変換 京都大学大学院情報学研究科 京都大学大学院情報学研究科 | 吉田千里 乾 敏郎 |
| o1-04 | 10:45-11:00 | 目標フレーミングが感情表象の活性に与える影響 名古屋大学 名古屋大学 | 竹橋洋毅 唐沢かおり |
| o1-05 | 11:00-11:15 | 到達把持運動における課題遂行可能性を考慮した予測制御モデル 京都大学大学院情報学研究科 京都大学 京都大学 | 竹村尚大 乾 敏郎 福井隆雄 |
| o1-06 | 11:15-11:30 | 到達把持運動の初期段階における重要な視覚情報の同定 (II) 京都大学大学院情報学研究科 京都大学大学院情報学研究科 | 福井隆雄 乾 敏郎 |
| 11:30- | 討論 | | |

5月8日(土) 13:20 ~ 14:50 口頭2 視覚認知・注意 (部屋1 KMB203)

座長 : 川畑秀明, 馬場伊美子

- | | | | |
|-------|-------------|---|----------------|
| o2-01 | 13:20-13:35 | 変化同定課題における視覚的作業記憶と注意の相互作用 京都大学大学院情報学研究科 京都大学大学院 | 宮辻博文 齊木 潤 |
| o2-02 | 13:35-13:50 | チェンジブラインドネスにおける刺激特性と検出妨害効果 鹿児島大学教育学部 鹿児島大学 | 川畑秀明 # 西山浩史 |
| o2-03 | 13:50-14:05 | 数の前注意的表象 東北大学 東北大学 | 馬場伊美子 岩崎祥一 |

o2-04 14:05-14:20 複雑な object における object 性と注意移動
 大阪大学人間科学部
 人間科学科
 大阪大学
 駒田悠一
 三浦利章

o2-05 14:20-14:35 自動性の獲得に及ぼす学習テンポの効果
 神戸大学大学院自然科学研究科
 神戸大学
 堤 教彰
 嶋田博行

14:35- 討論

5月9日(日) 10:00 ~ 11:45 口頭3 記憶 (部屋1 KMB203)

座 長 : 寺澤孝文 , 吉田哲也

o3-01 10:00-10:15 色に関する記憶と被暗示性について - 成人における記銘時間の検討 -
 日本大学大学院文学研究科
 日本大学
 日本大学
 丸山昌一
 山下雅子
 巖島行雄

o3-02 10:15-10:30 一枚絵ドル - ドル課題を用いた記憶高進の検討
 筑波大学心理学研究科
 早稲田大学理工学部
 林美都子
 宇根優子

o3-03 10:30-10:45 個人データに見られる5分間ドリル学習の効果 - 客観テストデータに関して -
 常葉学園大学
 岡山大学
 岡山東商業高校
 岡山大学
 筑波大学
 吉田哲也
 寺澤孝文
 # 前本恭子
 # 勝部厚志
 太田信夫

o3-04 10:45-11:00 自己評定の個人データに見られる5分間ドリル学習の効果
 岡山大学
 常葉学園大学
 岡山東商業高校
 岡山大学
 筑波大学
 寺澤孝文
 吉田哲也
 # 前本恭子
 # 勝部厚志
 太田信夫

o3-05 11:00-11:15 表記差が再認ヒューリスティックの使用に及ぼす効果の生起メカニズムの検討
 名古屋大学大学院環境学研究科
 名古屋大学大学院環境科
 豊沢純子
 唐沢かおり

o3-06 11:15-11:30 リアリティ・モニタリングモデルにおける MCQ の妥当性について
 日本大学
 日本大学大学院文学研究科
 日本大学
 山下雅子
 丸山昌一
 巖島行雄

11:30- 討論

5月9日(日) 10:00 ~ 11:45 口頭4 言語・聴知覚 (部屋2 KMB211)

座長 : 乾 敏郎, 原田悦子

- 04-01 10:00-10:15 2字漢字結合の読み過程(1)
東京電機大学工学部 黒沢 学
- 04-02 10:15-10:30 パイリンガルにおける語連想: 日英2言語での月名を刺激に用いて
同志社大学国際高校 松尾博文
同志社大学文学部 井上智義
同志社大学 # 倉内佐代
同志社大学 # 渡辺絵理
- 04-03 10:30-10:45 ペット飼育経験が概念知識に与える効果: 文検証課題による検討
法政大学社会学部 原田悦子
中央大学大学院文学研究科 須藤 智
法政大学社会学部 # 西木 愛
- 04-04 10:45-11:00 動詞<襲う>の多義性 - カード分類と意味素性評価に基づく検討 -
京都大学大学院教育学研究科 中本敬子
京都大学大学院人間・環境学研究科 # 野澤 元
独立行政法人通信総合研究所 # 黒田 航
- 04-05 11:00-11:15 幼児における構音の発達過程 その1: 幼児の言い誤りの定量的分析
京都大学情報学研究科 乾 敏郎
京都大学情報学研究科 大庭真人
京都大学情報学研究科 小川健二
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 天野成昭
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 近藤公久
- 04-06 11:15-11:30 幼児における構音の発達過程 その2: 大人との比較による分析
京都大学情報学研究科
知能情報学専攻 大庭真人
京都大学情報学研究科 乾 敏郎
京都大学情報学研究科 日高昇平
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 天野成昭
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 近藤公久

11:30- 討論

5月9日(日) 13:20 ~ 14:35 口頭5 感情・自己 (部屋1 KMB203)

座長 : 椎名 健

- 05-01 13:20-13:35 表情の瞬間情報処理 認知と感情の側面から
関西大学大学院総合情報学研究科 織田朝美
関西大学総合情報学部 加藤 隆
ATR 人間情報科学研究科 # 向田 茂
- 05-02 13:35-13:50 創造性評価のアイデア探索空間モデル: 新奇性とMDS指標値の関係
立命館大学大学院文学研究科 吉田 靖

- o5-03 13:50-14:05 感情表現語の誘導する最適画面位置の探索
筑波大学・図書館情報学系 椎名 健
- o5-04 14:05-14:20 腕組が空間記憶課題の成績に与える影響
同志社大学文学研究科 荒川 歩
- 14:20- 討論

5月9日(日) 15:40 ~ 17:25 口頭6 コミュニケーション (部屋1 KMB203)

座長: 尾田政臣, 八田武志

- o6-01 15:40-15:55 医療の場におけるリスク共有コミュニケーション:看護師を中心とする対話データの分析
東京大学大学院総合文化研究科 南部美砂子
法政大学社会学部 原田悦子
中央大学大学院文学研究科 須藤 智
鉄道総合技術研究所 重森雅嘉
杏林大学附属病院 # 福井トシ子
杏林大学附属病院 # 瀬戸僚馬
法政大学大学院人間社会研究科 # 加倉井華誉子
法政大学大学院人間社会研究科 # 野呂耕助
- o6-02 15:55-16:10 視覚的な公共サインの理解における色・文脈情報・高齢化の効果
法政大学社会学部 新井田恭範
法政大学社会学部 原田悦子
- o6-03 16:10-16:25 線遠近法を用いた垂直矢印の方向指示性
立命館大学文学部 尾田政臣
- o6-04 16:25-16:40 サイモン課題遂行に及ぼす他者の行為の影響
産業技術総合研究所 高濱祥子
産業技術総合研究所 熊田孝恒
- o6-05 16:40-16:55 高齢者の学習に与えるインタフェースデザインの影響:エラー分析
法政大学大学院人間社会研究科 谷上 望
法政大学社会学部 原田悦子
- o6-06 16:55-17:10 運動制限を主とする入院ストレスと認知機能について
名古屋大学 八田武志
名古屋大学 伊藤保弘
名古屋大学 永原直子
名古屋大学 # 長谷川幸治
- 17:10- 討論

5月9日(日) 15:40 ~ 17:25 口頭7 脳・ニューロ (部屋2 KMB211)

座長: 田浦秀幸, 西野由利恵

- o7-01 15:40-15:55 3次元物体の学習とトップダウン処理に関わる脳部位の特定
ATR 人間情報科学研究所 西野由利恵
ATR 人間情報科学研究所 # 安藤広志

| | | | |
|--------|-------------|---|--------------------------------|
| 07-02 | 15:55-16:10 | 自己運動の予測制御に関する神経回路の同定 京都大学大学院情報学研究科 京都大学大学院情報学研究科 京都大学大学院情報学研究科 仁愛大学人間学部 | 小川健二 乾 敏郎 杉尾武志 # 田中茂樹 |
| 07-03 | 16:10-16:25 | 箸使用に関与する神経基盤 2 : 実行段階への小脳内部モデルの寄与 京都大学大学院情報学研究科 京都大学情報学研究科 京都大学情報学研究科 | 今津杉子 杉尾武志 乾 敏郎 |
| 07-04 | 16:25-16:40 | 音韻系列の予測学習機構 : fMRI 研究 京都大学大学院情報学研究科 京都大学情報学研究科 京都大学情報学研究科 | 山村千草 杉尾武志 乾 敏郎 |
| 07-05 | 16:40-16:55 | 言語発達モデルの定量的解析 京都大学情報学研究科 京都大学 | 森藤大地 乾 敏郎 |
| 07-06 | 16:55-17:10 | Myers-Scotton's 4M-model verified on Japanese returnee' attrition data Kyoto Institute of Technology | Hideyuki Taura |
| 17:10- | 討論 | | |

ポスター発表 (会議室 - 地 A)

5月8日(土) 10:00 ~ 12:00 ポスター1 視知覚・聴知覚・注意

- | | | |
|-------|--|---|
| p1-01 | C F Qは時間的圧力下の注意配分行動を予測するか 名古屋工業大学大学院 名古屋工業大学大学院 大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院人間科学研究科 独立行政法人産業安全研究所 大阪大学大学院人間科学研究科 | 神田幸治 # 小早川竜彦 臼井伸之介 篠原一光 中村隆宏 太刀掛俊之 |
| p1-02 | ターゲット提示の時間的不確実性による注意の捕捉 中京大学大学院心理学研究科 中京大学 | 犬飼朋恵 # 和氣典二 |
| p1-03 | 知的障害の程度の違いが注意配分機能の練習効果に及ぼす影響 大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院 | 岡 耕平 三浦利章 |
| p1-04 | 同時並行作業にみられるマイクロスリップ 学習院大学人文科学研究科 | 伊原良奈 |
| p1-05 | Snarc 効果と個人差 東京海洋大学海洋工学部 産総研 産総研 Dundee , University | 下野孝一 氏家弘裕 # 斉田真也 # M.Fischer |
| p1-06 | 意味飽和の生起を表現するネットワークモデルの検討 東北学院大学大学院 人間情報学研究科 東北学院大学 東北学院大学 | 八島真友子 櫻井研三 加藤健二 |
| p1-07 | 前頭前皮質の長期持続的興奮と行動異常 福島県立医科大学 医学部生理学第2講座 | 浄土英一 |
| p1-08 | ストローク効果における半球間相互作用に関する検討 愛知淑徳大学 コミュニケーション研究科 愛知淑徳大学 | 西村律子 吉崎一人 |
| p1-09 | 遠近法の歪みの知覚が絵画の印象に与える影響 名古屋大学大学院環境学研究科 名古屋大学 | 石坂裕子 # 高橋晋也 |
| p1-10 | 実物刺激における観察距離の増加に伴う奥行き見積もりの減少 岡山大学大学院文学研究科 | 井口卓朗 |

| | | |
|-------|---|---|
| p1-11 | 視覚単語認知における文字位置の表現 中京大学心理学研究科 | 岡田順介 |
| p1-12 | なぞり動作の制御における手と外的枠組みの見えの効果 九州大学大学院人間環境学府 九州大学 | 助宮 治 # 中溝幸夫 |
| p1-13 | 速度表象に及ぼす距離要因の影響 - 視対象の運動速度の短期的な記憶維持 - 中京大学心理学研究科 中京大学 | 成本忠正 牧野義隆 |
| p1-14 | 視空間ワーキングメモリスパンテスト作成の試み 岩手大学大学院人文社会科学部 岩手大学人文社会科学部 | 川原正広 松岡和生 |
| p1-15 | 物体性視覚短期記憶における空間手掛かりの効果 福島大学生涯学習教育研究センター | 木暮照正 |
| p1-16 | 刃物の視覚的特徴が目撃者の注意に及ぼす影響 佐賀県警科学捜査研究所 九州大学 ベンチャービジネスラボラトリー 九州大学人間環境学研究所 九州大学人間環境学研究院 | 大上 渉 内野八潮 大沼夏子 箱田裕司 |
| p1-17 | “鑑識眼”の研究 再生描画を用いた記憶精度の検討 九州大学大学院人間環境学府 | 時津裕子 |
| p1-18 | 聴覚情報の知覚負荷が視覚情報処理に与える影響についての検討 日本大学文理学部 | 室井みや |
| p1-19 | 本の探索における色の誘目性と提示位置の関係 島根大学法文学部 島根大学 | 大澤圭田 北神慎司 |
| p1-20 | 視・聴・触覚刺激による感覚間反応促進 鹿児島大学大学院教育学研究科 鹿児島大学 | 小久保博幸 大坪治彦 |
| p1-21 | 音楽聴取が視覚記名材料の音韻的類似性効果に与える影響 法政大学大学院人間社会研究科 中央大学大学院文学研究科 中央大学大学院文学研究科 中央大学文学部 | 小松原裕輔 安永正史 須藤 智 兵藤宗吉 |
| p1-22 | 聴覚ストループ効果における干渉パターンの検討 新潟大学人文学部 新潟大学 新潟大学 新潟大学 新潟大学 | 荒生弘史 伊藤浩介 # 諏訪園秀吾 # 中田 力 # 宮崎謙一 |
| p1-23 | 気分誘導によって生じる注意バイアスが色判断課題に及ぼす影響 日本大学大学院文学研究科 日本大学文理学部 | 北村麻梨 # 山田 寛 |

5月8日(土) 13:20 ~ 15:20 ポスター2 身体・フィールド・日常認知

- | | | |
|-------|---|----------------------------------|
| p2-01 | 高校生の学校における「居場所」に関する認知 法政大学文学部 法政大学文学部 | 小高佐友里 渡辺弥生 |
| p2-02 | 授業レポートとして実施したアクションリサーチ課題の試み(1) 大阪府立大学総合科学部 | 桐村雅彦 |
| p2-03 | 教科を超えた観点からの図表の読みとり・作成能力(3) - 作成課題に関する探索的分析 - 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 神戸学院大学地域研究センター | 布施光代 山名裕子 |
| p2-04 | 自己生成課題が授業内容の理解に及ぼす効果 鳴門教育大学学校教育学部 | 皆川直凡 |
| p2-05 | 直列・並列回路の判断における課題解決方略の検討 鹿児島大学大学院教育学研究科 | 山田吉夫 |
| p2-06 | マンガ表現における感情記号(形喩)が感情認知に及ぼす効果 京都大学大学院教育学研究科 京都大学 京都大学 | 松田 憲 # 南 靖之 楠見 孝 |
| p2-07 | テレビゲームの熱中感に関する実験的検討 京都光華女子大学人間関係学部 | 酒井浩二 |
| p2-08 | 視覚シンボルの理解に果たす文脈の役割に関する研究 京都府立向日が丘養護学校 | 藤澤和子 |
| p2-09 | 広告接触前の感情状態が広告効果に与える影響 法政大学 法政大学 | 宮本啓史 福田由紀 |
| p2-10 | 規範意識と社会的認知の個人傾向(2) 科学技術振興機構 社会技術研究システム 科学技術振興機構 社会技術研究システム 目白大学・ 科学技術振興機構 社会技術研究システム 東洋英和女学院大学・ 科学技術振興機構 社会技術研究システム | 岡部康成 鎌田晶子 # 今野裕之 # 岡本浩一 |
| p2-11 | 陳述の虚偽検出に関する研究 自己拡大のウソと他人を貶めるウソの比較 東北大学大学院文学研究科 東北大学大学院文学研究科 | 佐藤 拓 仁平義明 |

| | | |
|-------|---|------------------------|
| p2-12 | 類似情報源下でソース・モニタリングが高齢者の記憶に及ぼす影響 日本福祉大学大学院 情報・経営開発研究科 愛知淑徳大学 | 山岸未沙子 坂田陽子 |
| p2-13 | 快感情の及ぼす実行機能への影響：感情誘導法に表情写真呈示を用いて 早稲田大学大学院文学研究科 | 井出野尚 |
| p2-14 | 他者注目と気分における被受容感・被拒絶感 山梨英和大学 | 杉山 崇 |
| p2-15 | 怒り感情による反応の願望 実行水準と日本人的コミュニケーション能力との関係 法政大学 法政大学 | 森田尚人 福田由紀 |
| p2-16 | 医薬品名の類似性に関する研究 薬剤師を対象とした実験の報告 立教大学文学研究科 立教大学 東京医科歯科大学 | 山出康世 芳賀 繁 # 土屋文人 |
| p2-17 | 確認強迫傾向にリアリティモニタリングと確信度が及ぼす影響 広島大学 生物圏科学研究科 広島大学 生物圏科学研究科 | 大谷貴重 # 岩永 誠 |
| p2-18 | 身体症状の認知と症状経験時の行動の関係 二松学舎大学文学部 | 改田明子 |
| p2-19 | 刺激の熟知性が高齢者の二重課題遂行に及ぼす影響 愛知淑徳大学コミュニケーション学部 コミュニケーション心理学科 愛知淑徳大学 | 村井一弘 坂田陽子 |
| p2-20 | 読書行為に対する態度の比較 - 黙読・音読・暗誦 - 法政大学文学部心理学科 | 福田由紀 |
| p2-21 | 日常生活における情報通信機器の(再)配置のありよう メディア教育開発センター・ 総合研究大学院大学 メディア教育開発センター・ 総合研究大学院大学 | 高橋秀明 # 黒須正明 |
| p2-22 | マインドシェアの新規指標の探索 - 反応時間を指標とする試み - 筑波大学心理学系 筑波大学心理学研究科 | 河野理恵 林美都子 |
| p2-23 | 受け取り動作の制御と最適動作選択過程の検討 東北大学大学院文学研究科 東北大学大学院文学研究科 | 柴田 寛 行場次朗 |
| p2-24 | 児童が友人に期待する悩みの相談に対する応答 聖徳大学大学院臨床心理学研究科 法政大学 | 中村友香 渡辺弥生 |

5月8日(土) 15:40 ~ 17:40 ポスター3 記憶

- | | | |
|-------|---|-----------------------|
| p3-01 | フラグメント完成課題における、呈示時間と処理水準効果 立命館大学大学院 文学研究科心理学専攻 | 佐藤文紀 |
| p3-02 | 維持・精緻化リハーサル中の記憶活性度の変化の実験的検討 中部大学人文学部 | 水野りか |
| p3-03 | 再認法による視空間的情報のリハーサルシステムの検討 中央大学大学院文学研究科 中央大学文学部 | 須藤 智 兵藤宗吉 |
| p3-04 | メロディの潜在記憶におけるオクターブ般化(2) 筑波大学心理学研究科 | 生駒 忍 |
| p3-05 | 歌の音楽情報と言語情報が歌詞の検索に及ぼす影響 名古屋大学環境学研究科 社会環境学専攻心理学講座 名古屋大学環境学研究科 社会環境学専攻心理学講座 | 高部由美子 川口 潤 |
| p3-06 | 印象の再認記憶への寄与に与える方向付け課題の効果 九州大学大学院人間環境学府 九州大学大学院人間環境学研究院 | 小松佐穂子 箱田裕司 |
| p3-07 | 再認成績に現れる数ヶ月以前の学習の繰り返し効果 岡山大学教育学部 岡山大学 | 勝部厚志 寺澤孝文 |
| p3-08 | 手がかり負荷が背景色文脈依存再認へおよぼす影響 静岡大学情報学部 静岡県立大学短期大学部 | 漁田武雄 漁田俊子 |
| p3-09 | 展望的記憶課題における無意図的想起に及ぼす個人差の影響 日本学術振興会・関西大学 | 森田泰介 |
| p3-10 | 被験者実演課題 (SPT s) の記憶検索時の処理に関する研究 立教大学大学院文学研究科 立教大学 富山大学 | 樋田 航 芳賀 繁 海老原直邦 |
| p3-11 | 虚記憶の生起にリストの直後再生の有無が及ぼす影響 大阪樟蔭女子大学 | 川上正浩 |
| p3-12 | それは誰に言われてやったのか? : 行為の記憶に関するソース判断 北海道大学大学院文学研究科 北海道大学 | 加地雄一 仲真紀子 |

| | | |
|-------|--|----------------------|
| p3-13 | 闕上・闕下呈示におけるフォールスメモリの検討 滋賀大学 東海女子大学 | 田中愛子 堀内 孝 |
| p3-14 | 行為事象の記憶のソースモニタリングⅡ 法政大学文学部 | 藤田哲也 |
| p3-15 | False recall and presentation order of associates University of Liege | Akira Mukai |
| p3-16 | シーンの記憶に及ぼす事後情報の効果 神戸学院大学大学院 人間文化科学研究科 | 因來愛実 |
| p3-17 | 情動的ストレスが目撃記憶の情報源モニタリング能力に及ぼす影響 九州大学大学院人間環境学研究科 九州大学 佐賀県警 | 大沼夏子 箱田裕司 大上 涉 |
| p3-18 | 認知符号化法は目撃者の記録を促進するか(2) 東京家政大学文学部 | 越智啓太 |
| p3-19 | 感情の質と強度が記憶に及ぼす非対称性効果(1) 九州大学大学院人間環境学府 東京家政大学 | 野畑友恵 越智啓太 |
| p3-20 | 過程分離手続きを用いた自伝想起課題の自動的処理の検討 千葉大学自然科学研究科 千葉大学文学部 | 青林 唯 須藤 昇 |
| p3-21 | 楽しい記憶に変える - 自伝的記憶のセルフコントロール - 東北大学大学院文学研究科 東北大学文学研究科 | 池田和浩 仁平義明 |
| p3-22 | 出来事感情価が自伝的記憶の無意図的想起に与える影響 東京学芸大学 東京学芸大学 | 雨宮有里 # 関口貴裕 |
| p3-23 | 自伝的記憶と忘却に関する研究(3) 中央大学 | 兵藤宗吉 |
| p3-24 | 100人のモナ・リザ: 記憶のコーディングのジェンダー差 東北大学文学研究科 | 仁平義明 |
| p3-25 | 自伝的記憶の想起と感情制御 東京大学大学院教育学研究科 日本学術振興会 | 榊美知子 |
| p3-26 | 感性印象が再認に及ぼす影響 2種類の再認課題による比較 東北大学大学院文学研究科 東北大学 | 作田由衣子 行場次朗 |

5月9日(日) 10:00 ~ 12:00 ポスター4 顔・言語・概念

- p4-01 未知顔の再認記憶に及ぼす提示時間と呈示間隔の影響
 京都光華女子大学 伊藤美加
 京都大学 吉川左紀子
 立命館大学 # 木原香代子
- p4-02 符号化時と検索時の処理の一致性が顔の再認に与える影響
 大阪大学大学院人間科学研究科 高原美和
- p4-03 示差性が顔の全体処理に及ぼす影響
 早稲田大学文学研究科 安田 孝
- p4-04 顔面表情の表出と認知に関する実験的研究
 立命館大学文学部 二塚亜実
 立命館大学 尾田政臣
- p4-05 顔口ボットCGの印象特性に関する検討
 東北大学大学院文学研究科・日本学術振興会
 ATR HIS 伊師華江
 ATR HIS 蒲池みゆき
 ATR HIS # Harold Hill
 ATR HIS # Marcia Riley
- p4-06 正立・倒立顔における表情認知構造のフラクタル次元の定量的差異
 北星学園大学社会福祉学部 竹原卓真
 帝塚山大学 # 落合史生
 産業技術総合研究所 # 渡邊 洋
 同志社大学 # 鈴木直人
- p4-07 事象関連電位を用いた曖昧表情の意味判断過程の検討
 日本大学大学院文学研究科 小川宜子
 日本大学大学院文学研究科 鈴木竜太
 日本大学文理学部 # 山田 寛
- p4-08 表情認知過程におけるカテゴリー判断段階に関する検討
 日本大学大学院文学研究科 渡邊伸行
 日本大学大学院文学研究科 鈴木竜太
 日本大学大学院文学研究科 # 山口拓人
 日本大学文理学部 # 山田 寛
- p4-09 再認前の言語化が示差性の異なる顔の記憶に及ぼす影響
 島根大学法文学部 北神慎司
 京都大学大学院教育学研究科 吉川左紀子
- p4-10 仮名語の認知における表記の妥当性の効果 - 語彙判断課題による検討 -
 科学技術振興機構 / 日本大学 臼井信男
 日本大学 巖島行雄
- p4-11 比喩の処理過程における文脈情報の役割: 2種類の新奇比喩の比較
 立命館大学文学研究科 中原 誠

| | | |
|-------|---|-----------------------|
| p4-12 | 語彙の意味評価性に及ぼす音象徴効果 - ストループ課題による検証 関西大学大学院社会学研究科 関西大学 | 水谷聡秀 雨宮俊彦 |
| p4-13 | 文字学習における「空書」の効果 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 | 丸山真名美 木村 純 |
| p4-14 | アナロジー生成における整合性探索過程 清泉女子大学 | 福田 健 |
| p4-15 | 日常における自然数の大小比較の認知過程 筑波大学 | 島田英昭 |
| p4-16 | 事物間の関係性と事物のまとまりの判断との関係 慶應義塾大学社会学研究科 慶應義塾大学 | 南雲美帆 伊東裕司 |
| p4-17 | 英語学習者による単語のイメージ性評定と偶発学習 神戸市立高専 | 西山正秋 |
| p4-18 | 連想課題を用いた概念地図作成法の効果の検討 桜花学園大学大学院 桜花学園大学大学院 | 杉浦詩帆 皆川 順 |
| p4-19 | 事前のプランの形成が行為のスリップに与える影響 椋山女学園大学 | 廣瀬直哉 |
| p4-20 | 偽 MHD における選択の偏好 筑波大学心理学研究科 筑波大学人間総合科学研究科 筑波大学心理学研究科 | 三好一英 若林真衣子 生駒 忍 |
| p4-21 | 認知的意思決定モデルとしてのディフュージョンカウンタ・モデル 早稲田大学 | 上田卓司 |
| p4-22 | 自由回答は誘導尋問にひっきりやすい? - 被暗示性尺度の再検討 畿央大学健康科学部 | 金敷大之 |

研究発表

口頭発表

5月8日(土) 10:00 ~ 11:45 口頭1 空間・イメージ (部屋1 KMB203)

座長: 高野陽太郎, 吉田千里

o1-01 外的な地図の歪みと認知地図・方位感覚の関係

法政大学社会学部

法政大学社会学部

新関亮太

原田悦子

近年,大学等へのアクセスマップにおいて「方位が正しくない(北が上ではない)」ものが見つけられるが,これにより人は現場で実際の方位とのギャップに違和感を覚える,または道に迷うといった影響を受けている.そこで,このような歪みのある外的地図が方向感覚の高い人/低い人それぞれに与える影響を明らかにするため,スケッチマップ法と方向感覚質問紙簡易版(竹内,1998)による質問紙調査を行った.その結果,いわゆる方向感覚にはトポロジカルな関係を中心とした空間把握と方位感覚の2要素が存在していること,特にトポロジカルな関係のみを利用している群は外的地図の歪みに影響を受けやすく,方位を把握できていない傾向が示された.また両要素を利用している群は,外的地図の歪みに影響されにくいと考えられたが,実際には同様の歪みを持つ地図が多く産出されていた.外的表象の歪みが人の方略により異なる影響を与えることが明らかにされた.

o1-02 鏡映反転: 高野説と Gregory 説の比較検証

東京大学文学部

高野陽太郎

鏡の中では左右が反対になって見えると言われる.この鏡映反転に関する最近の説明として, Takano(1998)説と Gregory(1987,1997)説の妥当性を実験データに基づいて比較する.両説は大きく分けて4点について異なる予測をする.実験データは,いずれの点についても Takano 説の予測を支持した.たとえば,初めから鏡に正対している被験者の背後に既知の文字と未知の文字が貼ってある場合,鏡の方に向き直るための回転が鏡映反転の原因であるとする Gregory 説は,どちらの文字についても鏡映反転は認識されないと予測する.一方,記憶表象と知覚表象の不一致が鏡映反転の原因であるとする Takano 説は,既知の文字だけについて鏡映反転が認識されると予測する.実験データは Takano 説の予測と一致した.また,既知の文字が物理的に左右反転されている場合, Takano 説は,鏡映反転は認識されないと予測する.実験データはこの予測とも一致した.

o1-03 身体の回転による身体中心的空间表現の変換

京都大学大学院情報学研究所

京都大学大学院情報学研究所

吉田千里

乾 敏郎

本研究では手の届かない空間の身体中心記憶表現が身体の回転後にどのように変換されるのかについて,ポインティング課題により検討した.被験者は暗所で2m前方に2秒間提示されたターゲットの位置を記憶し,3秒間の遅延時間中に身体を左右いずれかに10度または140度回転させた.遅延時間後,回転した向きからターゲットの提示位置を想起してポインティングした.測定したポインティングエラーは先行研究(吉田・乾,2003)における70度回転後のエラーと同様に,回転方向に対して逆方向に生じた.エラーの大きさは回転角度の増加に従い増加した.ターゲットが提示された領域の大きさは,回転角度の増加に従い収縮して再生された.これらの結果から,空間の身体中心座標系による記憶表現は身体回転により回転方向と逆方向にずれた位置に収縮して変換されるが,環境中心座標系による記憶表

現の利用により修正されることが予測される。

o1-04 目標フレーミングが感情表象の活性に与える影響

名古屋大学
名古屋大学

竹橋洋毅
唐沢かおり

目標フレーミングとは目標の内容を変えずにそれを表現する枠組を変える操作であるが、本研究は、望ましい結果、または望ましくない結果に注目した目標フレーミングが特定の感情表象を活性化させる可能性を検討した。感情表象の活性化の指標としては、修正ストループ課題(MacLeod,1991)を用いた。その結果、目標フレーミングが特定の感情表象を活性化させることが示された。すなわち、望ましくない結果に注目したフレーミングでは「安心 緊張」が「喜び 落胆」よりも活性化した。したがって、目標フレーミングが異なる感情経験を導くという従来の知見は、目標フレーミングが特定の感情表象を活性化させ、活性化した感情表象に基づき出来事の評価が行なわれる過程により生起している可能性が示唆された。

o1-05 到達把持運動における課題遂行可能性を考慮した予測制御モデル

京都大学大学院情報学研究科
京都大学
京都大学

竹村尚大
乾 敏郎
福井隆雄

ヒトの随意運動では、感覚フィードバックを用いた制御がなされている。しかし、運動制御信号の遠心路および感覚フィードバック信号の求心路におけるノイズと遅延の存在により、フィードバック制御のみでは速く正確な運動を実現することは困難であり、フィードフォワードによる予測制御も必要であると考えられている。本研究では、確率的制御理論の枠組みを用い、ヒトの到達把持運動の予測制御モデルを提案した。本モデルでは、制御対象である手の状態を内的に推定する機構を仮定することにより、ノイズおよび遅延に対してロバストな制御を行う。さらに、物体を把持する瞬間の手の状態を予測的に推定することにより、物体把持に必要なフィードフォワード制御を実現する。このモデルを用い、福井、乾(2003)による到達把持運動の実験をシミュレートした結果、把持成分に対する視覚フィードバックの影響の時間特性が再現できた。

o1-06 到達把持運動の初期段階における重要な視覚情報の同定 (II)

京都大学大学院情報学研究科
京都大学大学院情報学研究科

福井隆雄
乾 敏郎

前回の発表(福井・乾, 2003)に引き続き、到達把持運動、特にその初期段階において、物体および手腕の視覚情報が把持制御に及ぼす影響を検討した。運動中の手の見え(見えあり条件・見えなし条件)、運動開始後から対象物体の見えが遮断されている時間(0ms・150ms・350ms)、物体の大きさ(直径4cm・6cm、高さ11cm 共通)を要因とする3元配置の実験を行った。主な結果として、指間距離最大値(親指・人差指間)について、物体の見えは150ms条件と350ms条件間で有意差が認められ、福井・乾(2003)同様、運動加時間1000ms程の運動では150ms~350ms間の対象物体の視覚情報が把持制御に重要であることが明らかになった。さらに、手の見えの主効果、手の見えと物体の見えの交互作用も有意であり、把持制御における、運動中の手の見えの影響も示唆された。

o2-01 変化同定課題における視覚的作業記憶と注意の相互作用

京都大学大学院情報学研究所 宮辻博文
京都大学大学院 齊木潤

物体属性の変化のタイプを同定する課題である多物体恒常性追跡課題を用いた研究は、視覚的作業記憶の物体表象保持能力が従来の知見よりも制限されることを示した。また同じタイプの変化が2回起きる条件と、1回起きる条件を比較した実験は、変化2回条件の同定率の方が高く、最初の変化で注意が変化した物体に向き、次の変化の同定が容易になると説明された。しかし変化回数が条件間で異なるため、回数差による難易度の違いという説明も考えられる。本研究は変化の回数を同じにし、注意による説明の妥当性を検討した。実験1は同じ物体で1回目と2回目の変化のタイプが違う条件を設定した。実験2は1回目と2回目で変化する物体が異なる条件を設定した。注意による説明が妥当なら、実験1は2回目の変化の同定率が高くなり、実験2は同定率が同程度になると予想される。結果は注意による説明を支持し、注意が視覚的作業記憶の保持に影響することを示した。

o2-02 チェンジブラインドネスにおける刺激特性と検出妨害効果

鹿児島大学教育学部 川畑秀明
鹿児島大学 # 西山浩史

色の変化や対象の追加・削除の検出を課題とするチェンジブラインドネス実験において、刺激提示中に様々なタイミングで妨害刺激を与えることにより刺激変化検出がどのように変わるかを、自然画像と絵画画像を用いて、妨害刺激の提示タイミングや、視覚対象のカテゴリーの違い、変化内容の違いなどの比較から検討した。

o2-03 数の前注意的表象

東北大学 馬場伊美子
東北大学 岩崎祥一

1~4の個数を瞬時把握することは人間でも動物でも生まれつきできるといわれている。ドットを抽象的な数として瞬時把握しているかをみるためにドットの数の判断実験とドットのあとに数を刺激として提示したプライミング実験を行った。数5を呈示した場合、ドット数と数が一致したとき反応時間が促進され、プライミング効果がみられた。ほとんどのエラーはドットと数が不一致のときに生じた。ドットが課題に無関連であっても人間の脳はその数を自動的に瞬時把握しているため、ドットの数と数字が一致したときにエラーはほとんど見られなかった。数字もドットも人間の脳内では同じ抽象的な表象として取り扱っていることが示唆される。

o2-04 複雑な object における object 性と注意移動

大阪大学人間科学部 駒田悠一
人間科学科 三浦利章
大阪大学

注意は object-base で移動することが知られている。このとき、object 内部がさらに object に分割されることがあるか、またそのときに注意がどのように動くかを検証するため、実験が計画された。この実験では、Egaly(1994)に類似した方法を用いた。モニターを使用し、単純な線画刺激を用いた2次元空間において検証した実験1では、仮説は確認され、注意は大きな物体から順に1つずつ内部の物体へと移動することが示された。さらにこの結果が3次元空間でも見られるか、また3次元空間で object の分節基準は何であるかを検討するために実験3が計画されたが、実験2では仮説は確認できなかった。

o2-05 自動性の獲得に及ぼす学習テンポの効果

神戸大学大学院自然科学研究科
神戸大学

堤 教彰
嶋田博行

自動性の学習をアルファベットの加算作業で行った。たとえば $A + 2 = C$ 、 $B + 5 = G$ などの命題の正誤判断を連続して行い、反応時間を計測した。A から J までのアルファベットに、2 から 5 までの数字を加算したときのアルファベットの正誤判断を行った。半数は誤命題であり、一日 480 試行を 7 日間連続して行った。提示間隔として短い条件 (1 秒) と長い条件 (5 秒) を用意した。試行の当初では、加算される数字が少ない場合は、多いときに比べて反応時間が短く、数字を一つ一つ順番に加算していくが、練習が進むにつれて、加算される数字に関係なく、反応時間が一定で、記憶から直接アクセスされる状態になったとき、自動性が獲得されたと定義した (GD Logan らの instance theory)。学習のスピードが自動性の獲得に影響することを見出した。提示間隔が短いときには、自動性に到達したが、緩慢な学習では自動性に至らなかった。

5月9日(日) 10:00 ~ 11:45 口頭3 記憶 (部屋1 KMB203)

座長 : 寺澤孝文, 吉田哲也

o3-01 色に関する記憶と被暗示性について - 成人における記銘時間の検討 -

日本大学大学院文学研究科
日本大学
日本大学

丸山昌一
山下雅子
巖島行雄

本報告では色の記憶に関する、成人の被暗示性について検討した。参加者 (153 名の大学生) は 30 枚からなるカラースライドを見た後、スライドの内容についての質問紙に回答した。質問紙の 20 問中 4 問がターゲット刺激に関するもので、それぞれ色に関する誤った記述を含んでいた。参加者は質問紙への回答後、5 分間の妨害課題を経て、カラーサンプルよりターゲットの色を選択して回答した。その結果、4 つのターゲット刺激中 3 点については誘導の効果が認められ、スライド中で比較的目立つ刺激 1 点のみは群間の差が有意ではなかった。また一部の参加者には、スライド 1 枚あたりの提示時間を延長し、記銘時間の影響を検討したところ、誘導への抵抗がわずかに増加したが有意な変化は認められなかった。刺激の出現頻度やストーリーとの関連性など、符号化の程度と被暗示性の関連が示唆された。

o3-02 一枚絵ドル - ドル課題を用いた記憶高進の検討

筑波大学心理学研究科
早稲田大学理工学部

林美都子
宇根優子

林・宇根(2003)では、無意味絵記憶課題として著名なドルードル課題を用いて、ラベルあり条件下では記憶高進が生起しラベルなし条件では生起しないことを示して、代理検索回路仮説 (Kazen&Solis-Macias,1999)を支持し情報リサイクル仮説(意味優位性仮説)を提唱した。本研究では、通常の二枚絵ドルードル課題ではなく、一枚絵のドルードル課題を用いて、林・宇根(2003)の結果の再現性を検討した。ラベルを添えることによってドルードル課題を有意意味絵画課題として与えた実験 1 では記憶高進が生起したが、ラベルを添えないドルードル課題を提示した実験 2 では記憶高進は生起しなかった。この結果は林・宇根(2003)とほぼ同様であり、代理検索回路仮説と意味優位性仮説の双方が支持された。

o3-03 個人データに見られる5分間ドリル学習の効果 - 客観テストデータに関して -

| | |
|---------|--------|
| 常葉学園大学 | 吉田哲也 |
| 岡山大学 | 寺澤孝文 |
| 岡山東商業高校 | # 前本恭子 |
| 岡山大学 | # 勝部厚志 |
| 筑波大学 | 太田信夫 |

本研究は、人口判断課題を用いて、表記差が再認ヒューリスティックの使用に及ぼす効果と、その生起メカニズムを検討した。人口判断には漢字またはアルファベットで書かれた未知の中国都市を用い、反復プライミングで熟知性を操作した。そして熟知性を与えた都市の人口が、熟知性を与えなかった都市の人口よりも多く評定されるかどうかで再認ヒューリスティックの使用を確認した。その結果、表記（漢字、アルファベット）×熟知性（操作有、操作無）の4条件のうち、熟知性を与えなかった漢字表記の都市のみ人口が少なく評定されていることが示された。以上の結果は、再認ヒューリスティックが熟知性を手がかりにした判断であり、表記差の効果も熟知性の差として解釈可能であることを示唆している。

o3-04 自己評定の個人データに見られる5分間ドリル学習の効果

| | |
|---------|--------|
| 岡山大学 | 寺澤孝文 |
| 常葉学園大学 | 吉田哲也 |
| 岡山東商業高校 | # 前本恭子 |
| 岡山大学 | # 勝部厚志 |
| 筑波大学 | 太田信夫 |

現在、学校現場では子どもの基礎学力の低下に危機感をもち、百升計算のようなドリル学習が導入されるケースが見受けられる。しかし、そのようなドリル学習によって、実質的に子どもの学力が上がることを客観データに基づき示す研究は存在しない。本研究は、自覚できないほどのわずかな学習の効果を検出することが可能なマイクロステップ測定法に基づき生成した学習スケジュールを利用して、高等学校の英語授業を用いた5分間の英単語ドリル学習実験を実施した。1週間に約4回ある授業を5週間継続し、その間の学習到達度の変化を自己評定値に基づき分析した。その結果、平均データとして、学習効果の明確な積み重ねが検出されている（寺澤ら，2003b）。本発表は、自己評定値データについて、個人の到達度変化を報告する。本発表は、ごく一般的なドリル学習事態でマイクロステップ計測法が有効に機能するか否かを検討した結果を報告する。

o3-05 表記差が再認ヒューリスティックの使用に及ぼす効果の生起メカニズムの検討

| | |
|----------------|-------|
| 名古屋大学大学院環境学研究科 | 豊沢純子 |
| 名古屋大学大学院環境科 | 唐沢かおり |

本研究は、人口判断課題を用いて、表記差が再認ヒューリスティックの使用に及ぼす効果と、その生起メカニズムを検討した。人口判断には漢字またはアルファベットで書かれた未知の中国都市を用い、反復プライミングで熟知性を操作した。そして熟知性を与えた都市の人口が、熟知性を与えなかった都市の人口よりも多く評定されるかどうかで再認ヒューリスティックの使用を確認した。その結果、表記（漢字、アルファベット）×熟知性（操作有、操作無）の4条件のうち、熟知性を与えなかった漢字表記の都市のみ人口が少なく評定されていることが示された。以上の結果は、再認ヒューリスティックが熟知性を手がかりにした判断であり、表記差の効果も熟知性の差として解釈可能であることを示唆している。

o3-06 リアリティ・モニタリングモデルにおける MCQ の妥当性について

| | |
|--------------|------|
| 日本大学 | 山下雅子 |
| 日本大学大学院文学研究科 | 丸山昌一 |
| 日本大学 | 巖島行雄 |

ある自伝的な出来事が、自分自身が実際に体験したことなのかそうではなく想像上の体験なのかを判断するリアリティ・モニタリングについて、Johnson ら(1988)による Memory Characteristics Questionnaire (MCQ)が考案されている。この MCQ は、個々の記憶の特徴、たとえば、視覚的情報、詳細さ、空間的情報、時間的情報、感情の強度、複雑さ、について評定を行うと、実際に経験したものと、想像上のといった記憶の特徴において、評定値に差が生じるという仮説に基づいて作成されている。ところで MCQ は日本では MCQ の結果の報告は見受けられない。そこで今回はリアリティ・モニタリングモデルにおける MCQ の妥当性について、海外での体験を題材とした結果を報告する

5月9日(日) 10:00 ~ 11:45 口頭4 言語・聴知覚 (部屋2 KMB211)

座長：乾 敏郎, 原田悦子

o4-01 2字漢字結合の読み過程(1)

| | |
|-----------|------|
| 東京電機大学工学部 | 黒沢 学 |
|-----------|------|

比喩理解・概念結合研究において、AisB 型の文や名詞・名詞結合の理解過程が研究されている。漢字は統語処理を含みつつも名詞・名詞としても解釈できるなどの特徴をもつため、これらの研究に対して貢献できる可能性がある。英語における比喩文は、「長い単語として1まとまりの処理をされる」側面と、「個々の単語の意味からボトムアップ的に構成される」側面をもっていることが知られている。そこで、日本語の2字漢字結合がその両方の処理を受けているかどうかを検討することを試みた。さまざまなタイプの2字の漢字結合を用意し、そのうちの前半・後半を先行提示して理解に要した反応時間を測定し、漢字がいかに統語処理がなされているかを検討した。結果は現在分析中である。

o4-02 バイリンガルにおける語連想：日英2言語での月名を刺激に用いて

| | |
|----------|--------|
| 同志社国際高校 | 松尾博文 |
| 同志社大学文学部 | 井上智義 |
| 同志社大学 | # 倉内佐代 |
| 同志社大学 | # 渡辺絵理 |

本研究は、日英二言語での月名を刺激に用いて、バイリンガルにおける語連想の調査を実施し、それぞれ言語での反応特性、両言語での反応にみられる個人差などを分析することを目的とした。具体的には、海外で2年以上英語で教育を受けた日英2言語のバイリンガルの高校生100名を対象にして、日本語・英語で記された月名を提示して、その語から連想されることばを30秒でできるだけ多く回答することを求めた。その結果、日本語での連想と英語での連想を比較した場合、両言語に共通の反応語が数多く見られる反面、それぞれの言語圏の文化や言語に特有の反応が、各月で具体的に示された。また、両言語で類似の反応語が多い個人と、逆にそれぞれの言語特有の反応が多い個人が認められ、その生育歴や教育歴などとの関係が考察された。

o4-03 ペット飼育経験が概念知識に与える効果：文検証課題による検討

法政大学社会学部 原田悦子
中央大学大学院文学研究科 須藤 智
法政大学社会学部 # 西木 愛

人は長年に渡る経験からどのように概念的知識表象を形成・変化していくのか。本研究は、ペットのモノ化・モノのペット化現象をとりあげ、犬・ネコなど長期ペット飼育経験のある大学生30名、全くない大学生30名を対象に、文検証課題によりペットに関する概念的知識表象の差異を検討した。ペット、人、ロボット、モノの4群に属する11の主語と、否定的肯定的感情、欲求、状態に関する14の述語を組み合わせた文(例：ペットは嫉妬する)をランダムな順に提示し、直感的な諾否を求め、反応比率、判断に要した時間を分析の対象とした。分析の結果、主語「ペット」に対する反応は2群間で有意な差が見られないが、ペット経験あり群は、動物群やモノ群の主語に対し、生物非生物区分をより明確により速く反応することが示された。ただし主語「アイボ」については逆の傾向が見られ、これらの概念変化が相互作用イメージを反映していることが示唆された。

o4-04 動詞<襲う>の多義性 - カード分類と意味素性評定に基づく検討 -

京都大学大学院教育学研究科 中本敬子
京都大学大学院人間・環境学研究科 # 野澤 元
独立行政法人通信総合研究所 # 黒田 航

本研究では、動詞の多義性について<襲う>を取り上げ大学生を対象とした実験を行った。実験では<AがBを襲った>形式の例文36文(二人の強盗が銀行を襲った等)について、カード分類と意味素性評定を実施した。カード分類課題では各文に含まれる<襲った>の意味に基づき36文を任意のグループに分類するよう求めた。意味素性評定課題では各例文に対して<襲い手は目に見える>等の素性の確信度評定を求めた。2つの実験結果に対しそれぞれクラスター分析を行ったところ、下層での例文の纏まりは概ね一致していた。この結果は黒田・野澤(2004)と一致する。本研究は、(1)一般の日本語話者が用法の違いによる動詞の意味の差異を敏感に検出でき、(2)意味素性評定によってそのような差異を記述することが可能なことを示唆する。また、本研究はこれまで(具体)名詞の意味を主に扱ってきた心理学研究に対し、動詞の意味を扱う手法を提案する。

o4-05 幼児における構音の発達過程 その1：幼児の言い誤りの定量的分析

京都大学情報学研究科 乾 敏郎
京都大学情報学研究科 大庭真人
京都大学情報学研究科 小川健二
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 天野成昭
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 近藤公久

本研究では、各モーラ発声時における大人の舌の座標値と幼児の言い誤りから、幼児の構音特性の解明を試みた。まず、SA・SK 幼児2名の16ヶ月齢から48ヶ月齢までの言い誤りを、自然場面におけるそれぞれの発話データからモーラ単位で抽出した。その後、音韻的誤りの分析を行い、語彙獲得との関係について調べた。言い誤りのタイプは置換・脱落・付加・転換の4種類のうち、置換が圧倒的に多く言い誤り全体の8割近くを占めていた。そこでさらに詳しく置換の言い誤りを分析するため、SA・SKそれぞれの置換の言い誤りを3期間に分け、各期間における各モーラ間の混同行列を作成した。さらに、ルースの選択公理により、各モーラに対するバイアスとモーラ間の類似度とに分離した。最後に、この類似度行列からMDSにより、各モーラ間の類似度空間を求めた。その結果、SA・SKそれぞれの言い誤りのデータから6次元の類似度空間が得られた。

o4-06 幼児における構音の発達過程 その2：大人との比較による分析

京都大学情報学研究科
知能情報学専攻 大庭真人
京都大学情報学研究科 乾 敏郎
京都大学情報学研究科 日高昇平
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 天野成昭
NTT コミュニケーション
科学基礎研究所 # 近藤公久

本研究では、各モーラ発声時における大人の舌の座標値と幼児の言い誤りから、幼児の構音特性の解明を試みた。まず、大人の構音器官のデータとして国立国語研究所報告(1990)より舌の座標値を求めた。次に、乾ら(2004)が求めた SA・SK 各幼児の各モーラについての 6 次元空間の座標値と舌の座標値との間の関係を、SEM(構造方程式モデリング: Structural Equation Modeling)を用いて計算した。この際、SA・SK の舌の座標値をそれぞれ仮定し、仮定した座標値と各モーラの類似度の関係式及び、大人の舌の座標値との関係式から計算モデルを構成している。関係式は月齢の期間ごとに計算されており、前者の関係式は、舌のモーラの類似度空間への影響を示し、後者は SA・SK それぞれの幼児の構音器官が発達過程における変化を示している。その結果、構音が安定していく過程が観察された。

5月9日(日) 13:20 ~ 14:35 口頭5 感情・自己 (部屋1 KMB203)

座長：椎名 健

o5-01 表情の瞬間情報処理 認知と感情の側面から

関西大学大学院総合情報学研究科 織田朝美
関西大学総合情報学部 加藤 隆
ART 人間情報科学研究所 # 向田 茂

本研究は、人が瞬間的に変化する表情をどの程度的確に処理できるかについて実験的検討を加えたものである。実験刺激については、表情の静止画像を用いて、モーフィングによる動画作成という手法をとった。動画作成にあたっては、ベースの(変化の前後の)表情、途中で変化する表情、変化表情の強弱、表情変化の速度という4つの要因を操作した。被験者は、好意度評定課題では、ビデオ画面に表示される表情がどの程度の好意度を表すものかについて7段階で評定するよう求められ、表情分類課題では、途中で変化する表情が笑顔・悲しみ・怒り・無表情のいずれであるかを判断するよう求められた。表情変化の速度を480msから300ms, 180ms, そして120msまで速めてみたが、笑顔と特に怒りの表情

については、好意度という情動性の判断において変化表情の快不快と整合性のある影響が見られるとともに、表情認知についても妥当な分類成績が得られた。

o5-02 創造性評定のアイデア探索空間モデル: 新奇性と MDS 指標値の関係

立命館大学大学院文学研究科 吉田 靖

創造的な作品の評定について、吉田・服部・尾田 (2003) は、作品に含まれる部分的構成要素間の非類似度により、その創造性評定が説明できると考え、指標として MDS 指標値を定義した。本研究は、創造物を新奇性、解決、精巧さと統合の 3 因子で捉える理論 (Besemer & O'Quin, 1986) に基づく質問紙の縮小版 (White & Smith, 2001) を用い、MDS 指標値がどの因子に対応するのかを調べた。実験では、吉田他 (2003) で生物生成課題が実施された際に得られた 40 個の作品について、60 人の大学生による評定を行なった。探索的因子分析を行なったところ、創造性評定が 3 つの因子に分かれることが示され、MDS 指標値は新奇性の因子と比較的強い相関があることが分かった。これらのことから、MDS 指標値は創造的作品の新奇性に関わる特徴を記述する方法として有用であることが示唆される。

o5-03 感情表現語の誘導する最適画面位置の探索

筑波大学・図書館情報学系 椎名 健

感情表現語を最適に表す画面位置を探るために、コンピュータを用いて、楽しい・つまらない、おとなしい・活発な、力強い・弱々しい等の 12 の感情表現語について、各試行につき 1 つの図形をマウスでドラッグアンドドロップして、画面上を自由に移動した後に配置してもらう。6 図形を試した結果は、個人差は小さくないものの、大勢の位置プロットをマスとして捕らえるとき、感情語に個性的な配置になっていることを認めることが出来た。概してポジティブな語は画面の上方、ネガティブな語は画面下方に配置された。また、グリーンヴァルトの時空認識図との対応について検討した。

o5-04 腕組が空間記憶課題の成績に与える影響

同志社大学文学研究科 荒川 歩

腕組行動は問題解決場面において頻繁に見られる行動の一つであり、性差も大きいとされている。藤井 (2000) は、語彙の説明課題を用い、自己接触が思考を促進する可能性を指摘しているが、この腕組行動が問題解決において実際に役立っているのかどうかについては、十分な検討がなされていないと思われる。本研究では、大学生と大学院生 33 名(女性 17 名: 男性 16 名)が、ハノイの塔を用いた空間記憶課題に参加した。各参加者は前半の 6 問、あるいは、後半の 6 問のどちらかに腕組をするように求められた。課題の正答率を従属変数とした分散分析の結果、腕組を行なう時期(前半・後半)と性別の交互作用に有意傾向が見られ、前半に腕組をした男性は、腕組時に正当率が低い傾向が見られた。このことは、腕組をすることが必ずしも思考を促進するのではなく、逆に腕組をすることによって思考が抑制される課題が存在する可能性を示していると思われる。

5月9日(日) 15:40 ~ 17:25 口頭6 コミュニケーション (部屋1 KMB203)
座長: 尾田政臣, 八田武志

o6-01 医療の場におけるリスク共有コミュニケーション: 看護師を中心とする対話データの分析

| | |
|----------------|----------|
| 東京大学大学院総合文化研究科 | 南部美砂子 |
| 法政大学社会学部 | 原田悦子 |
| 中央大学大学院文学研究科 | 須藤 智 |
| 鉄道総合技術研究所 | 重森雅嘉 |
| 杏林大学付属病院 | # 福井トシ子 |
| 杏林大学付属病院 | # 瀬戸僚馬 |
| 法政大学大学院人間社会研究科 | # 加倉井華誉子 |
| 法政大学大学院人間社会研究科 | # 野呂耕助 |

様々な人やモノが交錯する医療現場は事故・エラーにつながるリスクが高く、また医療行為には本来リスクが伴うため、医師、看護師、患者など全関係者間で様々なリスクを共有する必要がある。その方法の一つが対話であるが、現実にはコミュニケーションの不足・不良による意図伝達エラー、それに端を発する事故が多数発生している。本研究は、医療の場におけるリスクの共有や意図伝達エラー等の実態を捉えることを目的とし21名の看護師にICレコーダ装着を依頼、看護業務中の対話データの収集・分析を試みた。のべ約100時間の書き起しデータから、看護師は同時並行的に様々な相手と対話しており、相手の職務技能の推定から効果的な情報共有を行った事例や、対話が成立しているようでありながら発話内リスクが低く評価され、共有が不確実なままに対話を終えた事例等が見いだされた。医療事故防止の観点から事例を考察すると共に、研究方法上の問題について検討する。

o6-02 視覚的な公共サインの理解における色・文脈情報・高齢化の効果

| | |
|----------|-------|
| 法政大学社会学部 | 新井田恭範 |
| 法政大学社会学部 | 原田悦子 |

文字を使用しない視覚記号による公共サインは、情報のユニバーサルデザインとして期待されている。しかし、サインの理解は若年層に比べ高齢者では低いとの研究報告があり、またサインが抽象的であるほどその意味理解において、色の意味や背景知識の有無など各種要因が影響を与えられ、と考えられる。そこで本研究では、大学生・高齢者各24名を対象に、24種の公共サインの理解過程を検討する実験を行い、色ならびに文脈情報の有無の効果を検討した。各条件でのサイン意味の正答率について分析した結果、1)理解の年代差は大きく見られたが、サインおよびその状況の経験頻度が影響を与えている可能性があること、2)若年層においては色が何らかの文化的意味を持つ場合に、恣意的な着色が理解を阻害すること、3)文脈情報の存在は強く影響し、特にサインの意味・形態が抽象的である場合に効果が大きいこと、が示され、サインのデザインに関する示唆が得られた。

o6-03 線遠近法を用いた垂直矢印の方向指示性

| | |
|----------|------|
| 立命館大学文学部 | 尾田政臣 |
|----------|------|

進行方向を指示する記号として垂直面上に描かれた上向き矢印が一般的に用いられている。上向き矢印は物理的には上方を指しているにも関わらず、なぜ進行方向を指示していると認知されるのであろうか。生得的に知覚されるのならば、線遠近法的に矢軸の幅を矢の先端に近づくほど細く描いたならば、矢印の方向がより進行方向を指示していると認知されるようになるであろう。一方学習による効果によって進行方向と認知されているならば、矢軸を等幅に描いた矢印の方向指示性と同等な認知傾向を示す

はずである。この疑問を上向き矢印、下向き矢印について矢軸の幅を先端ほど細くする条件、等幅の条件、後端ほど細くする条件を設定し実験的に検証した。その結果、上向き矢印と下向き矢印では、異なる認知傾向を示した。この結果から、垂直に描かれた矢印の方向の認知には学習の効果があることが示唆された。

o6-04 サイモン課題遂行に及ぼす他者の行為の影響

産業技術総合研究所 高濱祥子
産業技術総合研究所 熊田孝恒

刺激-反応適合性課題の一種であるサイモン課題では、位置の無関係の属性（色・形など）に基づいて選択反応（キー押し）を行うと、刺激の位置と反応キーの位置が一致するときに反応時間が速くなる（サイモン効果）。通常、我々の行動は、他者の行為の知覚的表象だけではなく、観察者である我々の意図をも反映している。本研究では、他者の行為の知覚や観察者の意図がサイモン課題の遂行に及ぼす影響を検討するために、手がかりで反応者を指示して二人一組でサイモン課題を行わせた。その結果、同席した他者が課題を遂行する場合は、同席した他者が課題を遂行しない場合よりもサイモン効果が大きかった。さらに同席した他者と同時にサイモン課題を行う場合は、直前の試行で他者が反応したほうが、直前の試行の反応者が本人であるときよりもサイモン効果が大きかった。従って、他者の行為の知覚や観察者の意図によりサイモン効果が促進される可能性が示唆された。

o6-05 高齢者の学習に与えるインタフェースデザインの影響：エラー分析

法政大学大学院人間社会研究科 谷上 望
法政大学社会学部 原田悦子

高齢者が感じる IT 機器の使いにくさの要因を検討するため、高齢者・大学生各 32 名を対象とし、作業の構造、表現を変えた 4 つのインタフェースデザインを比較した。複数の作業を自分で選択できる螺旋デザイン、全作業が強制的かつ系列的に提示される系列デザイン、系列デザインの一部を省略できるスキップデザイン、および螺旋デザインを画面上ではなくアルバム型紙メディアで提示した本デザインを用いて、3 回の学習試行を行い、その後全員が螺旋デザインで 3 回のテスト試行を行った。操作エラー分析の結果、大学生では条件間の差がほとんど見られなかったのに対し、高齢者は螺旋デザイン群で初期から一貫してエラーが多く、またスキップデザイン群ではテスト段階で多くのエラーを示した。すなわち学習段階での系列デザイン、本デザインの優位性が示され、高齢者にとっての「使いにくさ」解決において若年層とは異なる学習支援が必要であることが示唆された。

o6-06 運動制限を主とする入院ストレスと認知機能について

名古屋大学 八田武志
名古屋大学 伊藤保弘
名古屋大学 永原直子
名古屋大学 # 長谷川幸治

股関節疾患や脊髄疾患などによる外科手術を受ける患者は運動制限と外科手術を受ける不安を主として強いストレス状況下に置かれる。このような運動制限や手術の結果に関する不安によるストレスで、認知機能や感情コントロールに問題を生じることが整形外科医の間では周知の事実である。これらの事柄に対応する処遇を検討する目的で、今回、入院患者の認知機能と感情状態を継続的に評価する機会を得たのでその結果の一部を報告する。注意、記憶、言語流暢性、視空間性情報処理、社会サポート、ADL、ストレス検査、うつ検査、痛み尺度に関する検査バッテリーを入院直後、手術説明の後、術後 2 週間、退院時（術後 6 週間）縦断的に実施した。今回は脊髄手術群と股関節手術群の結果を比較する。

5月9日(日) 15:40 ~ 17:25 口頭7 脳・ニューロ (部屋2 KMB211)

座長: 田浦秀幸, 西野由利恵

o7-01 3次元物体の学習とトップダウン処理に関わる脳部位の特定

ATR 人間情報科学研究所 西野由利恵

ATR 人間情報科学研究所 # 安藤広志

3次元物体の視覚表象は脳の下側視野に獲得されることがサルの生理実験により示唆されているが、人の場合どこに獲得されるのか明確ではない。また、獲得された物体表象が入力情報の分析に利用されるトップダウン処理の脳内過程に関して、明らかにされていない。そこで本研究では、fMRI 脳活動計測により、3次元物体の学習とトップダウン処理に関わる脳部位の特定を試みた。本実験の学習フェーズでは、3次元情報(両眼視差・陰影)を付加した新奇物体の識別、記憶、再認の各課題を、テストフェーズでは、記憶情報に基づく3次元形状判断と入力情報に基づく3次元形状判断の課題を繰り返した。各課題遂行時の脳活動計測により、3次元物体の学習では紡錘状回、記憶に基づくトップダウン処理では紡錘状回、頭頂間溝、運動前野に強い活動が見られ、3次元物体認識における側頭・頭頂・前頭の各領域間のダイナミックな処理が明らかになった。

o7-02 自己運動の予測制御に関する神経回路の同定

京都大学大学院情報学研究科 小川健二

京都大学大学院情報学研究科 乾 敏郎

京都大学大学院情報学研究科 杉尾武志

仁愛大学人間学部 # 田中茂樹

小川ら(2003)は、頭頂側頭接合部(TPJ), および後部頭頂皮質(PPC)が視覚遅延フィードバックにおける運動予測制御に重要であることを示した。本研究ではその結果を踏まえ、新たな実験条件を加えて運動予測制御モデルに基づいた神経回路の考察を行った。実験にはターゲットの動きに合わせた曲線のトレーニング課題を用い、課題遂行中の脳活動を fMRI で計測した。その際、視覚フィードバックに遅延がある条件、および経路の曲線が呈示されない条件を加えた。実験結果から、TPJ の活動と遅延条件における運動パフォーマンスとの間に正の相関が見られた。また自己の運動誤差が視覚的に与えられる経路あり条件で強い PPC の活動が見られた。以上の結果から、PPC において視覚フィードバック情報により得られる運動誤差が計算され、TPJ において視覚運動統合により自己運動の予測制御がなされていることが示唆された。

o7-03 箸使用に關与する神経基盤2: 実行段階への小脳内部モデルの寄与

京都大学大学院情報学研究科 今津杉子

京都大学情報学研究科 杉尾武志

京都大学情報学研究科 乾 敏郎

神経心理学の知見から、道具使用の実行とパントマイムでは異なった神経基盤の寄与が示唆されてきた。これを検討するため、箸の使用の実行時とイメージ化、パントマイムおよび手の使用時の脳活動を、1.5T fMRI を用いて計測し、検討を行った。結果、実際の箸使用においてのみ、右小脳外側部の活動が観察され、イメージ化、パントマイムと使用の実行との比較では、左下頭頂小葉の活動が有意であった。このことから、箸使用とそのパントマイム、イメージ化では、異なった神経基盤が関与することが確認された。さらに、小脳の活動が箸の入出力特性を反映する道具の内部モデルの活動を反映し、左下頭頂小葉の活動が意図的な操作の想起を反映していることが示唆された。また、このような異なった神経基盤の関与を仮定することにより、観念運動失行とその症状である BPO (body part as objects) を説明しうると考える。

o7-04 音韻系列の予測学習機構：fMRI 研究

京都大学大学院情報学研究所 山村千草
京都大学情報学研究所 杉尾武志
京都大学情報学研究所 乾 敏郎

乾(1998)が提唱した「運動系列予測学習仮説」では、言語処理における予測機能の重要性が指摘されている。本研究では、音韻系列の予測的処理に関与する脳活動を fMRI で観察し、構文知識の獲得に関わる神経基盤を検討した。人工文法(Reber,1967)に基づいて提示される音韻系列に対して、次に提示される音韻を予測し、その正誤判断を行う予測課題と、ランダムに提示された音韻が1時刻前に提示された音韻と一致しているかを判断する照合課題を行い、両課題を比較し予測学習機構を調べた。また予測課題では、最終セッションのみランダムな音韻系列を提示した。その結果、人工文法に基づく系列を用いた場合のみ、構文処理に関わるとされる BA44 の活動がみられた。また学習初期段階では尾状核が、学習が進むにつれて左被核および BA6 が高い活動を示した。このことから、学習段階によって異なるネットワークが関与していることが示唆された。

o7-05 言語発達モデルの定量的解析

京都大学情報学研究所 森藤大地
京都大学 乾 敏郎

森藤ら(2003)は、言語の基本的な語順や語彙の獲得を説明できるニューラルネットワークを提案した。本研究では、モデルのシミュレーション結果を定量的に分析し、幼児の語彙獲得過程との比較検討を行った。乾ら(2003)は、幼児の語彙獲得データをロジスティック曲線でよく説明できることを示している。そこでモデルの語彙獲得データに対し、ロジスティック曲線を当てはめたところ、高い決定係数が得られた。さらに、モデルが幼児の語彙発達と同様の特徴を持つことが示された。また単語を空間的に組織化する語彙マップは、統語的カテゴリに語彙のカテゴリが埋め込まれる形で組織化されたが、系列情報を用いずに単語のみを語彙マップで学習させた場合には、このような組織化は行われなかった。以上の結果から、モデルが幼児と同様に系列情報を単語のカテゴリ化に利用し、類似した語彙発達を示すことが認められた。

o7-06 Myers-Scotton's 4M-model verified on Japanese returnee' attrition data

Kyoto Institute of Technology Hideyuki Taura

Myers-Scotton's 4M-model is applied to explain attritional processes of primary languages that Japanese returnees used in the L2 milieu before returning to Japan. The 4M-model is a language production model which is comprised of a concept formation system and an utterance formulator, which explains the language acquisition/attrition process. In this framework, content morphemes are directly activated in the mental lexicon by a speaker's intention followed by "early system morphemes" (i.e. articles like "the" and plural ""s). It is only in the later stages of producing surface structures when the formulator receives directions from the concept formation system, that late system morphemes such as bridge system morphemes (e.g. "of") and outsider system morphemes (e.g. subject-verb agreement) are activated. Based on this theory, content morphemes are the first to be acquired and attrited. This model is tested on longitudinal attrition data from a Japanese returnee.

ポスター発表 (会議室 - 地 A)

5月8日(土) 10:00 ~ 12:00 ポスター1 視覚・聴覚・注意

p1-01 C F Qは時間的圧力下の注意配分行動を予測するか

| | |
|----------------|---------|
| 名古屋工業大学大学院 | 神田幸治 |
| 名古屋工業大学大学院 | # 小早川竜彦 |
| 大阪大学大学院人間科学研究科 | 臼井伸之介 |
| 大阪大学大学院人間科学研究科 | 篠原一光 |
| 独立行政法人産業安全研究所 | 中村隆宏 |
| 大阪大学大学院人間科学研究科 | 太刀掛俊之 |

日常生活における認知的な失敗行動の経験を調査するC F Q (Cognitive Failures Questionnaire) は、実験室実験によるいくつかの注意パフォーマンスと関連があることが知られている。本研究では、C F Qで測定される失敗経験の程度が、注意配分行動に与える影響を与えるのかを、注意集中の程度、そして刺激提示ペース変化による時間的圧力(タイムプレッシャー)の観点から調べることを目的とした。実験では、自由視状態における視覚刺激弁別課題を実施した。課題はディスプレイ中央部、及び負荷として時折周辺部に出現する数値刺激の偶奇弁別反応であった。ディスプレイ中央部数字の刺激サイズ及び刺激提示速度が、注意集中要因及び時間的圧力要因として操作された。C F Q高得点者と低得点者を対象とした反応時間及びエラー率に関する実験結果より、C F Q得点と空間的知覚負荷及び時間的圧力下における注意配分行動との関係を検討する。

p1-02 ターゲット提示の時間的不確実性による注意の捕捉

| | |
|---------------|--------|
| 中京大学大学院心理学研究科 | 犬飼朋恵 |
| 中京大学 | # 和氣典二 |

注意の焦点位置に複数の刺激が短時間に連続して提示された場合、その位置以外の刺激は注意を捕捉する(Folk et al., 2002)。このspatial blinkではターゲットとディストラクターの提示位置が異なっていたが、2つが同位置に提示された場合でも捕捉は生じる(Ghorashi et al., 2003)。ただしこの実験では、ターゲットが必ずRSVPの最後に提示されたため、ターゲットに対する時間的不確実性に関して疑問が残る。そこで本実験では、RSVPによって提示された刺激群の中から、ターゲットを検出し同定させる実験を行った。その結果、ターゲットに先行して同色のカラー・シングルトンが提示された場合、ターゲットの正答率が低下した。このことから、ターゲットに対する時間的不確実性が存在する場合には、ターゲットと同位置に存在するシングルトンが注意を捕捉することが明らかになった。

p1-03 知的障害の程度の違いが注意配分機能の練習効果に及ぼす影響

| | |
|----------------|------|
| 大阪大学大学院人間科学研究科 | 岡 耕平 |
| 大阪大学大学院 | 三浦利章 |

知的障害者の注意配分機能についてBaddeleyら(1997)が考案した二重課題、Pencil-and-paper課題を用いて検討した。Pencil-and-paper課題は記憶範囲課題とトラッキング課題から構成され、作動記憶モデル(Baddeley,1986)の音韻ループと視空間スケッチパッドにそれぞれ負荷を想定する。音韻ループと視空間スケッチパッドに同時に負荷をかけることで、これらに注意を配分する機能である中央実行系について検討できる。双方の課題の単独課題条件と二重課題条件においてパフォーマンスを比較し、前者に対する後者のパフォーマンス低下率によって注意配分機能を検討した。中度と軽度の知的障害者を総合し、障害者と健常者の注意配分機能を検討した結果、両者に違いは見られなかった。知的障害の程度が注意配分機能に及ぼす影響を更に検討するため、知的障害の程度を中度と軽度に分け注意配分機能を検討した。

p1-04 同時並行作業にみられるマイクロスリップ

学習院大学人文科学研究科

伊原良奈

日常行為において、文脈と関係のない接触や躊躇といった、行為の微小な停滞であるマイクロスリップが観察される。鈴木・佐々木(2001)は、下位タスク中と比べて、下位タスク移行時にマイクロスリップがより頻繁に生起することを見出した。彼らは飲み物と菓子を準備するという比較的複雑でないタスクの観察を行い、先行下位タスクの終了後に異なる下位タスクへ移行する場面のマイクロスリップを捉えた。しかし、より複雑なタスクでは、先行下位タスクの終了前に異なる下位タスクへ移行する場面が出現すると考えられる。そこで本研究では、複数下位タスクの同時並行作業が生じやすい調理作業をタスクとして用い、下位タスク移行時におけるマイクロスリップの生起傾向を調べた。スムーズなタスク移行と停滞を伴うタスク移行の比較から、タスク制約の働きに関して考察を行った。

p1-05 Snarc 効果と個人差

東京海洋大学海洋工学部

下野孝一

産総研

氏家弘裕

産総研

斉田真也

Dundee, University

M.Fischer

提示されたアラビア数字が偶数であるか奇数であるかを判断させると、その反応時間は数の大きさと数字の提示される空間位置(水平位置)に依存する(SNARC効果)。この効果は、読書習慣(ヨーロッパでは左から右)との関係で論じられており、中東、たとえば、イスラエル人では生じないことが報告されている。そこで、本研究では、垂直方向にも水平方向にも読む習慣がある、日本人で、Snarc効果が生じるかを、漢数字とアラビア数字を使って調べた。その結果、アラビア数字でSnarc効果を示す被験者では、漢数字では類似の効果(数の大きさと反応時間に相関)はなかった。一方、漢数字で相関の見られた被験者では、アラビア数字では顕著なSnarc効果は見られていない。実験結果は、全体としては、Snarc効果はなかったが、読書習慣が影響をしている、という考えと一致するものである。

p1-06 意味飽和の生起を表現するネットワークモデルの検討

東北学院大学大学院

八島真友子

人間情報学研究科

東北学院大学

櫻井研三

東北学院大学

加藤健二

語の持続的注視によるその語の意味の喪失あるいは減衰をさす意味飽和の生起を説明するネットワークモデルの考案を試みた。閾値を持つノードから成る4層のネットワークを仮定したこのモデルは、相互活性化モデルと活性化拡散モデルを結合・拡張したもので、特徴分析から意味表象に至る一連の語処理過程を含む。そこでは、ノード間の興奮性及び抑制性結合の組み合わせによる単純な演算により、語の注視開始と同時に出力しはじめた意味ノードが、時間経過とともに次第にその出力を低下・停止する過程として意味飽和が表現される。また、意味飽和に深く関連するプライミングやゲシュタルト崩壊がこのモデルにおいてどのように表現されるかも、あわせて報告する。

p1-07 前頭前皮質の長期持続的興奮と行動異常

福島県立医科大学

浄土英一

医学部生理学第2講座

Phencyclidine(PCP)は、ヒトにおいて統合失調症と類似した症状を引き起こす麻薬として知られており、これを投与された動物は、現在、統合失調症のもっとも信頼性の高い薬理学的モデルと考えられている。しかし、PCPが統合失調症様の行動異常を引き起こす神経機構について、ほとんど明らかにされていない。

い。我々は、無麻酔・自由行動下のラットを被験体とした単一ニューロン活動の記録と、リバースダイアリシス法によるPCP局所灌流、麻酔下のラットを被験体とし、電気生理学的に投射関係を同定した単一ニューロンに対する薬物の局所投与実験により、PCPがニューロン活動に及ぼす効果について検討した。実験結果から、PCPは前頭前皮質ニューロンの発火活動を長時間にわたり持続的に亢進させること、また、この持続的興奮が海馬からの興奮性入力により生じていることを明らかにした。

p1-08 ストループ効果における半球間相互作用に関する検討

愛知淑徳大学
コミュニケーション研究科 西村律子
愛知淑徳大学 吉崎一人

これまでのラテラルリティ研究では、左右大脳半球間の機能的非対称性ばかりに焦点が当てられてきたが、近年、健常脳における脳梁の存在から半球間相互作用にも目が向けられている。しかし、半球間相互作用を干渉効果の側面から検討する研究は数が少なく、一貫した結果が得られていない。そこで本研究では、ストループ課題を応用し、ターゲットとしてカラーパッチ、ディストラクターとして処理の優位半球が異なる黒インクの漢字と仮名を使用することによって、ディストラクターの処理効率の違いが、半球内・半球間における干渉量に及ぼす影響を検討することを目的とした。その結果、ディストラクターが漢字・仮名にかかわらず、ターゲットが左視野に呈示される場合、右視野呈示よりも干渉が大きくなる傾向が示された。また、一側視野呈示条件における干渉が両視野呈示条件で消失することを示した。

p1-09 遠近法の歪みの知覚が絵画の印象に与える影響

名古屋大学大学院環境学研究科 石坂裕子
名古屋大学 # 高橋晋也

本研究では、絵画の表現技法のひとつである遠近法に着目し、遠近法が不正確な絵画を刺激とし、遠近法の歪みが絵画の印象に与える影響について検討した。まず絵画の遠近法の歪みを示す教示文の効果が絵画の「新奇性」を表す尺度などで確認された。次に被験者が自発的に遠近法の歪みを知覚し、そのことが絵画の印象に影響を与えているかを、遠近法が不正確なオリジナル絵画とその絵画の遠近法が正確になるよう操作された絵画の印象の比較、絵画に関する自由発話中の遠近法の歪みに関する発話の有無によって検討した。その結果、遠近法の歪みは必ずしも自発的に知覚できるわけではなく、自発的知覚がない場合には絵画の印象も変化しなかった。ただし、絵画の「奥行き正確さ」判断でオリジナル条件の歪みを判断できた被験者では前実験でみられた教示効果と同様の方向に印象評価されていた。遠近法の歪みの知覚は絵画の「新奇性」に影響を与えることが示唆された。

p1-10 実物刺激における観察距離の増加に伴う奥行き見積り量の減少

岡山大学大学院文学研究科 井口卓朗

CRT上での研究(Johnston(1991), Collett, et al.(1991))を参考にして、刺激をCRT上に提示する意味を考えるために、暗室内で実物刺激を用いて、約2mの範囲の観察距離で、奥行き見積り量が変化するかをみた。そのとき、刺激までの観察距離がわかりにくい状況下で、2種類の刺激を用いて検討した。その結果、どちらの刺激でも2mの範囲で奥行き見積り量が急激に減少した。このことから、奥行き見積り量には観察距離が重要な意味を持っていることが示唆された。したがって、観察距離がわかりにくいCRT上での研究と観察距離がわかりにくい現実空間での知覚は同様である。しかし、CRT上での研究ほど極端な結果は見られず、物理的な値に近い結果がえられたことから、実物刺激を用いた研究ではより正確な知覚を行うことができる。その理由としては、実物刺激での研究は様々な手がかり(陰影など)が含まれていることなどが考えられる。

p1-11 視覚単語認知における文字位置の表現

中京大学心理学研究科

岡田順介

視覚提示された単語の認知過程を研究する上で、単語内の文字位置がどのように表現されているのかを検討することは重要であり、これまでも多くの処理方法での説明がなされてきた。これに対し、カタカナ単語を用いた語彙判断課題において、提示された単語にアナグラムが存在する（例：ミルク クルミ）ことが単語認知に促進的な効果を持つことが報告されている。これは単語表象が活性化される際に文字位置の情報が厳密に扱われていないことを示唆する。一方で、単語認知過程に文字単位の系列処理が関与していることを示唆する OUP (Orthographic Uniqueness Point) の効果が報告されている。これらから、単語認知過程にこのような系列処理が存在し、この処理において結果的に文字位置が表現されていると考えられる。本実験では、複数の単語表象の活性化が原因であると考えられる類似語の効果への OUP の影響を観察し、これを検討した。

p1-12 なぞり動作の制御における手と外的枠組みの見えの効果

九州大学大学院人間環境学府

助宮 治

九州大学

中溝幸夫

図形の輪郭と指先の動きを同期させるなぞり (manualtracing) 課題の動作制御における手と外部環境の見えの効果を検討した。被験者は、机上で胴から 40cm の距離に呈示された直線 (5,10,15cm) 又は円 (直径 5,10,15cm) の輪郭を人差し指でなぞる課題を行った。この動作をデジタルビデオカメラ (30frame/s) で撮影し、得られた画像から指先の位置座標を解析した。その結果、動作距離と図形の形状が動作時間、速度、動作の最終位置の正確さに影響する傾向が示された。また手と外的枠組みの見えを独立に操作した条件では、外的枠組み情報が利用できる場合には、手の視覚情報の利用が低下するという傾向が示された。しかし一方では、最終位置の正確さに手の見えが影響することも示された。これらの結果は、なぞり動作の制御において、様々なタイミングで手や外的枠組みの視覚情報が使い分けられていることを示唆している。

p1-13 速度表象に及ぼす距離要因の影響 - 視対象の運動速度の短期的記憶保持 -

中京大学心理学研究科

成本忠正

中京大学

牧野義隆

複数の刺激が同時もしくは各刺激が時系列に提示される配置情報はそれぞれ独立した記憶貯蔵庫により記憶保持されているのか。同時提示の配置情報は体制化されて保持されることが報告されている (Jiang, Olson, & Chun, 2000)。もし、時系列提示の各刺激位置もまた体制化されて記憶保持されるなら、記憶時において空間属性 (同時) そして時空間属性 (時系列) という違いはあるが、それぞれの情報は同じ記憶システムにより保持されること考えられる。本研究ではこれを検討する。

p1-14 視空間ワーキングメモリスパント作成の試み

岩手大学大学院人文社会科学研究所

川原正広

岩手大学人文社会科学部

松岡和生

ワーキングメモリの容量に関する個人差を測定するテストとしては、主に音韻ループに関わるリーディングスパントテストが広く用いられている。しかしその一方で、視空間的なワーキングメモリ容量の個人差についてはまだ十分な検討が行われていないようである。本研究では、視空間的なワーキングメモリの容量を測定するテストの作成を試みた。本テストは視空間情報の処理と保持を同時に行わせるもので、コンピュータ画面に9つの色をランダムにターゲット刺激として呈示し、刺激と同じ色を選択しながらその場所を記憶し回答させる課題 (SPACETASK) と、9つの模様をランダムにターゲット刺激として呈示し、刺激と同じ模様を選択しながらその模様を記憶し回答させる課題 (PATTERN TASK) の2種類からなる。今回は同時に、リーディングスパントテスト、メンタルローテーションテスト、SPACERELATIONS を実施し、これらテスト間の関係について検討した。

p1-15 物体性視覚短期記憶における空間手掛かりの効果

福島大学生涯学習教育研究センター 木暮照正

Jiang, Olson, & Chun (2000)は、物体性視覚短期記憶に空間配置の認知が促進的な影響を及ぼすことを示した。本研究では、この指摘を参考に、空間配置に関する手掛かりが物体性視覚短期記憶に及ぼす影響について、Vogel, Woodman, & Luck (2001)で用いられた変化検出法を用いて検討した。コンピュータ画面に、色と角度で特徴付けられ、かつ小円形のプレイスホルダー内に配置された線分2,4,6個からなる刺激（見本刺激）を瞬間的に呈示し、約1秒後同じもしくは一部分異なる刺激（照合刺激）を呈示して、被験者に照合を求めた。空間手掛かりなし条件は通常の変化検出法と同様であったが、あり条件では見本刺激が呈示される直前にプレイスホルダーのみが空間手掛かりとして呈示された。実験の結果、空間手掛かりのありとなし条件とに差異は認められなかった。

p1-16 刃物の視覚的特徴が目撃者の注意に及ぼす影響

佐賀県警科学捜査研究所 大上 渉
九州大学
ベンチャービジネスラボラトリー 内野八潮
九州大学人間環境学研究所 大沼夏子
九州大学人間環境学研究院 箱田裕司

最近の凶器注目効果研究では、先端の尖った出刃包丁は、尖っていない菜切り包丁と比べ、その視覚的詳細情報がよく記憶されることが報告されている。この報告から、出刃包丁の形状が視覚的に検出されやすいことが示唆される。本研究では、包丁の視覚的特徴と検出されやすさの関係について、視覚探索課題を用いて検討した。実験では、包丁の線画（出刃包丁または菜切り包丁）を3×3の配列で呈示した。被験者には、呈示された包丁中に異なる包丁が含まれるかについて判断させた。その結果、菜切り包丁中に1枚だけ呈示された出刃包丁は、出刃包丁中に1枚だけ呈示された菜切り包丁と比べ、より速く検出されることが明らかになった。今回の実験結果は、出刃包丁が菜切り包丁よりも視覚的に検出されやすいことを示すものである。

p1-17 “鑑識眼”の研究 - 再生描画を用いた記憶精度の検討 -

九州大学大学院人間環境学府 時津裕子

熟練した考古学者は、出土遺物を素早く正確に見極め、観察対象に対する高精度の記憶保持を長期にわたって行うなど、物質文化の分類と同定に関する総合的な認知技能“鑑識眼”を体得している。遺物観察時の眼球運動測定を通して、考古学的熟達者は特徴的な注視パターンをもつことがわかっている。また初学者や考古学経験を持たない者と比較すると、観察対象の記憶成績がよい。本発表では、遺物観察時の注視パターンとその後に行われた再生描画（スケッチ）の分析を通して、観察方略と記憶精度の関係について検討を行う。

p1-18 聴覚情報の知覚負荷が視覚情報処理に与える影響についての検討

日本大学文理学部 室井みや

注意を向けて処理する視覚情報の知覚負荷が低ければ注意を向けていない他の視覚情報も自動的に処理が進む（Lavie, 1995）。これは、注意を向ける情報の処理に使用されず余った処理資源が、自動的に注意を向けられない情報の処理に割り当てられるためと考えられる。室井（2003）では聴覚情報の知覚負荷の大きさが視覚情報の処理に影響しないことを示し、情報を知覚するために必要な処理資源は感覚モダリティ間で共有されていない可能性を示した。一方、Tellinghuisen&Nowak(2003)は、注意を向けて処理する視覚情報の知覚負荷の大きさが、聴覚情報の処理に影響しないことを示したが、聴覚情報として用いられた刺激の種類に問題があると考えられる。本研究ではそれらの点を改良し、視覚情報の知覚負荷の大きさが聴覚情報の処理に影響するかどうかについて検討した。

p1-19 本の探索における色の誘目性と提示位置の関係

島根大学法文学部
島根大学

大澤圭田
北神慎司

本研究では日常生活における視覚的探索において、色の誘目性と提示位置がその探索時間の短縮に役に立つのかを視覚的探索課題を通じて検証する。実験1では視覚的探索課題において提示されたターゲットの本の背表紙を探索し、その検出反応時間から提示位置情報と色情報の2つの要因による誘目性への影響を検討し、分散分析の結果、誘目性の高い赤色と黒色は探索時間が短かった。また、画面中央部の提示位置では探索時間が短く、それ以外の提示位置では中央部より有意に長くなり、周辺部間では差はあまり見られなかった。実験2では白抜き文字情報を本の背表紙に付与した以外は実験1と同条件で行い、結果、誘目性の高い赤色と黒色は探索時間が短かった。しかし、実験1と異なり赤色と黒色の提示位置別の反応時間の違いに有意差は見られなかった。

p1-20 視・聴・触覚刺激による感覚間反応促進

鹿児島大学大学院教育学研究科
鹿児島大学

小久保博幸
大坪治彦

視覚刺激に対する反応時間が、それとほぼ同時に提示される聴覚刺激によって短縮される効果(感覚間反応促進)が報告されている。中野(1994)は、両刺激間のSOAを広範囲に設定し、その検討を行っている。また、小久保ら(2003)は、同様の現象が小学校3年生においても見出されることを報告し、この現象が児童期においても同様に生起することを確認した。本研究は、新たな対提示パラダイムの感覚様相として触覚(振動刺激)を用い、視覚-聴覚間、視覚-触覚間の反応促進を、児童および成人で検討したものである。その場合、従来の研究と異なり、反応時間の対象となるターゲット刺激に、視覚だけでなく、聴覚刺激や触覚刺激の条件も設定し実験を行った。その結果、いずれにおいても反応促進が見られ、そのピークはほぼ同様のSOAであり、感覚様相の組み合わせの違いに関わらず共通に生起する現象であることが示唆された。

p1-21 音楽聴取が視覚記憶材料の音韻的類似性効果に与える影響

法政大学大学院人間社会研究科
中央大学大学院文学研究科
中央大学大学院文学研究科
中央大学文学部

小松原裕輔
安永正史
須藤 智
兵藤宗吉

Salame & Baddeley(1989)と大槻・吉川(1995)は、数字やアルファベットの系列再生課題に対する並列的な音楽聴取の妨害効果を報告している。本研究は、二重課題法を用いて、並列的な音楽聴取が、構音抑制と同様なメカニズムで発話運動プランニング(斎藤,1999)の働きを妨害しているかどうか明らかにすることを目的に検討を行った。第1実験では、音楽聴取の9桁の数字の系列再生課題に与える影響を検討し、Salameらの結果を追認した。第2実験では、音韻的に類似した9個のアルファベットの系列再生課題に対する並列的な音楽聴取の影響を検討した。結果から、課題遂行時に音楽を聴取した場合、音韻的類似性効果が有意に小さくなることが確認された。以上の結果から、音楽聴取による妨害効果は、構音抑制と同じ原理 発話運動プランニングの働きを妨害することにより生じていると考えられる。

p1-22 聴覚ストループ効果における干渉パターンの検討

新潟大学人文学部
新潟大学
新潟大学
新潟大学
新潟大学

荒生弘史
伊藤浩介
諏訪園秀吾
中田 力
宮崎謙一

聴覚ストループ実験において、絶対音感(AP)保持者と非保持者の干渉パターンを検討した。ド、レ、ミ等のシラブルのそれぞれを、あるピッチで歌ったものを刺激として用いた(固定ド唱法におけるピッチとシラブルの対応関係が保たれた刺激と保たれていない刺激が用意された)。特徴的な結果は、AP保持者だけが、単なるシラブルの追唱において、不一致のピッチからの干渉を受けた点であった(実験1, 2A)。この結果は、ピッチ同定における正答率の違いから説明できるものではなかった。音楽用の鍵盤を用いてシラブルを答える場合においても、AP保持者は非保持者よりも大きな干渉効果を示した(実験2B)。つまり、口頭反応と鍵盤反応のいずれにおいても、AP保持群と非保持群とで干渉の生起の仕方に差が生じた。APの有無により、ピッチに関する処理の自動性に違いが生じることが考えられた。

p1-23 気分誘導によって生じる注意バイアスが色判断課題に及ぼす影響

日本大学大学院文学研究科
日本大学文学部

北村麻梨
山田 寛

不安感情が、不安と関連のある情報に対する選択的注意を増加させるということが、多くの研究で明らかにされている。その選択的注意、あるいは注意バイアスを研究するために用いられてきたのが情動ストループ課題である。情動ストループ課題とは、感情価を持つ刺激語の字の色を判断するもので、不安患者や不安の強い被験者がこの課題を行うと、不安と関連する刺激語の色判断に遅延が見られることが示されている。そこで本研究では、意図的に操作された気分と刺激語が持つ感情価の違いとの間に関連があるのか検討を行った。健常者を対象に、音楽を用いて気分を快または不快に誘導し、刺激語の提示時間を閾上提示と閾下提示の2条件を設定して情動ストループ課題を行った。そして、誘導された気分が快刺激と不快刺激の反応時間にどのような影響を与えるのか、さらに刺激語の提示時間と関連があるのか、比較、検討を行った。

5月8日(土) 13:20 ~ 15:20 ポスター2 身体・フィールド・日常認知

p2-01 高校生の学校における「居場所」に関する認知

法政大学文学部
法政大学文学部

小高佐友里
渡辺弥生

高校生に対する質問紙調査から、学校場面における居心地のよい場所と悪い場所の因子構造の比較を行った。「居場所」形成に影響を及ぼす要因について検討した結果、「居場所」として選択される空間とそうでない空間では、例えば「教室」「廊下」「トイレ」といったように物理的には同じ空間であっても、本人の認知によりその空間に対する評価に変化がみられることが示唆された。具体的には、居心地のよい場所・悪い場所ともに同じ評価項目を用いたにもかかわらず、居心地のよい場所では「快-不快」「安定感」「関係性」の3因子が抽出されたのに対し、悪い場所では「イメージ・雰囲気」「物理的評価」「他者存在」の3因子が抽出され、認知の相違が認められた。

P2-02 授業レポートとして実施したアクションリサーチ課題の試み(1)

大阪府立大学総合科学部

桐村雅彦

心理学研究法を紹介する授業において、希望する受講生に期末試験に代わる課題としてアクションリサーチ手法によるレポート作成を求めた。実施単位は個人とグループ、実施内容は単位ごとの計画に一任し、ほとんど計画作成段階から口を挟まなかった。提出レポート内容から、学生が介入を試みようとした身近にある問題課題と、その問題解決への介入方法選択について、現状と問題点などを考察する。

p2-03 教科を超えた観点からの図表の読みとり・作成能力(3) - 作成課題に関する探索的分析 -

名古屋大学大学院

教育発達科学研究科

布施光代

神戸学院大学地域研究センター

山名裕子

図表の読みとりや作成は小学校から扱われるものであり、また、本来教科を超えた要素が多分に含まれているが、これらの包括的な検討はあまりなされていない。そこで、本研究では大学生を被験者とし、呈示された表からどのような図を作成するのかを検討した。その際、易課題と難課題を設定し、作成される図の種類、軸の単位、記述される情報数などが異なるのかを検討することも目的とした。結果として、全体的に円グラフ、棒グラフが最も多く作成されることが得られた。課題間の比較から、情報が1次元で呈示された場合(易課題)には円グラフが、情報が複数次元で呈示された場合(難課題)には棒グラフが作成されやすいことが示唆された。また、呈示された情報をどれくらい作成した図に記述するかという情報数は、易課題では分散しているが、難課題では情報数2が最も多いことも得られた。このように、作成される図には課題の内容が影響していると考えられる。

p2-04 自己生成課題が授業内容の理解に及ぼす効果

鳴門教育大学学校教育学部

皆川直凡

大学院学校教育研究科の授業科目の単元(3時限配当)において、各授業開始時に、受講者に対し、自己生成課題として、当該単元に関わる既有知識を自由記述することを求め、それらの内容を分析した。さらに、当該単元終了後に論述式のレポートを課し、授業内容と照合して理解度を評定した。自己生成課題の提出者は、未提出者と比べて、単元レポートにおいて成績評価を得た。また、自己生成課題における受講者の記述内容は、単元レポートの内容に強く関与していた。本研究の結果は、既有知識の自由記述に伴う自己生成精緻化が授業内容を学習者の知識体系に位置づける機能をもつことを明示している。

p2-05 直列・並列回路の判断における課題解決方略の検討

鹿児島大学大学院教育学研究科

山田吉夫

Siegler(1976,1978)のルール評価アプローチは、子どもの持っている課題解決方略をルールとして記述し、適切な課題のセットを提示することで得られる反応パターンに基づいて、子どもの課題解決能力を評価するとういう点に特徴があるとされている(浅川等,1993)。本研究では、小学生が乾電池の直列・並列回路について、回路図の比較によって判断するという課題を作成するとともに、課題解決方略としてのルールが小学3年生~6年生の各年齢段階で複雑化・精緻化していくかどうかについて検討した。その結果、学年間で並列回路の判断パターンに差がみられ、構造比較による課題においても質的に異なるルールの適用が示唆された。

p2-06 マンガ表現における感情記号(形喩)が感情認知に及ぼす効果

京都大学大学院教育学研究科

松田 憲

京都大学

南 靖之

京都大学

楠見 孝

本研究ではマンガにおいて登場人物の感情を表現する感情記号(形喩)(例:涙,湯気,震え線,ギザギザなど)が読み手の感情認知に及ぼす効果を検討した。実験1は、大学生参加者40名が、感情記号と

感情語との適合度を5件法で評定した。感情記号は感情ごとに2種類、記号の個数3段階(1~3個)、記号無しの計31種類からなった。感情語は、5感情(喜怒哀驚恐)に3段階の強度(例:不安,恐れ,戦慄)の計15語からなった。結果は、高強度語で記号の数に比例して強度評定値が上昇した。一方、低、中強度語で記号の数に関わらず適合度が高かった。実験2では、参加者40名が、感情記号または感情語の擬態語への適合度を5件法で評定した。擬態語は5感情(例:驚)ごとに4種(ぎょ,ぎくっ,びくっ,どきっ)の計20個であった。因子分析の結果、5感情と対応する5因子が抽出され、感情語と感情記号の布置は意味空間内で同型の構造を持っていた。

p2-07 テレビゲームの熱中感に関する実験的検討

京都光華女子大学人間関係学部

酒井浩二

Malone(1981)は、ゲームを含め、内発的動機づけの高い教育をするために、挑戦、空想、好奇心の3つの要素が必要と指摘した。本研究では、テトリスを使って、テレビゲームに熱中する要素について実験した。テトリスの熱中感に作用する要素として、テレビゲームの「目標性」「報奨性」「操作性」「現実性」について重回帰分析により調べた結果、「目標性」が最も大きく影響した。その目標の最も大きなものは、1ゲームをなるべく長時間持続させることであることが示唆された。テレビゲームは内発的動機づけの高い行動である点から、テレビゲームへの動機づけの要素がCAIに適用される可能性について議論した。その1つの方法として、学習時の「時間への挑戦」が内発的動機づけを高めうる点を指摘した。

p2-08 視覚シンボルの理解に果たす文脈の役割に関する研究

京都府立向日が丘養護学校

藤澤和子

視覚シンボルは、文字がわからなくても使用できる理解の容易性をもつが、話しことばや文字に比べて、語彙数が少なく、助詞の品詞がないなど、統語的には不十分な面がある。そのため、視覚シンボルを使って二者間でコミュニケーションが成立するには、受信者が発信者や話題についての文脈を得ることが必要であることが予測される。本研究では、上記の仮説を検証するために、視覚シンボルで表記された2通の手紙を調査材料として、96名の大学生を4群に分け(A群は文脈なし/B群は発信者に関する文脈あり/C群は話題のキーワード提示/D群はBとCを足した文脈を与え)手紙を日本語の書きことばに翻訳する課題を実施した。調査結果から、発信者の意図を読み取るには、両者の文脈がともに重要であることが示された。そして、シンボルによるコミュニケーションの成立に文脈がどのように影響を与えるか、その役割について考察がなされた。

p2-09 広告接触前の感情状態が広告効果に与える影響

法政大学

宮本啓史

法政大学

福田由紀

本研究では、広告に接触する前の感情状態が広告効果に及ぼす影響について実験による検討を試みた。実験手続きの概要は、視聴覚刺激によって快・中性・不快のいずれかの感情状態に操作された被験者に広告を見せ、広告効果を測定し、測定値について感情状態条件間で比較するものである。広告効果は広告呈示直後と呈示から1週間後の2度にわたって測定した。被験者は法政大学の学部生106名である。実験の結果、被験者の感情状態が広告されたブランドへの評価的な反応(ブランドに対する態度)を決定しうることを確認した。また、不快感情状態で広告に接触した被験者は、広告接触直後の測定では比較的低いブランド態度を示したが、1週間が経過することでより肯定的な態度に変化するという結果が得られた。これらのことから、広告に接触する前の感情状態が快・不快の次元に関わらずある程度の強度を有していた場合、最終的には広告効果を促進する可能性があるかと結論した。

p2-10 規範意識と社会的認知の個人傾向(2)

| | |
|------------|--------|
| 科学技術振興機構 | |
| 社会技術研究システム | 岡部康成 |
| 科学技術振興機構 | |
| 社会技術研究システム | 鎌田晶子 |
| 目白大学・ | |
| 科学技術振興機構 | |
| 社会技術研究システム | # 今野裕之 |
| 東洋英和女学院大学・ | |
| 科学技術振興機構 | |
| 社会技術研究システム | # 岡本浩一 |

企業における組織的な違反や不正の発生は、周囲で違反を見かけても、それを黙認したり、周囲の違反に迎合したりすることが繰り返されることにより、組織の中で違反や不正が蔓延してしまうということがある。このような不正を防ぐために、どのような性格特性が、違反の黙認や迎合しやすいのか知ることが重要である。そこで、本研究では、大学生に、違反に対する黙認傾向や迎合性に関する質問紙に回答させた後、Implicit association test と質問紙により「怠惰さ」に関する性格傾向を測定した。その結果、違反黙認傾向は、IAT で測定された「怠惰さ」とのみ関連が認められた。このことは、違反的に関する個人特性の測定手法としての IAT の有用性を示唆している。

p2-11 陳述の虚偽検出に関する研究 自己拡大のウソと他人を貶めるウソの比較

| | |
|--------------|------|
| 東北大学大学院文学研究科 | 佐藤 拓 |
| 東北大学大学院文学研究科 | 仁平義明 |

我々はウソの話と真実の話では、陳述内容でどのような要素が異なっているか、虚偽検出基準の分析を行ってきた。これらの基準がウソのタイプによって影響を受けるどうかを検討するために、今回は「自己拡大のウソ」と「他人を貶めるウソ」の比較を行なった。その結果、「副詞」、「修飾語」は「他人を貶めるウソ」で真実の陳述に比べて含有率が高くなるが、「自己拡大のウソ」では含有率が高くならなかった。これに対して「名詞」、「固有・具体表現」はウソのタイプの影響を受けにくい虚偽検出基準である可能性が高かった。今回は、さらに、自己拡大あるいは他者の貶めというウソの目標を達成するために、どのような「ウソの方略」が使用されるかについて分析を行った。その結果、直接的な方略のほか、他者を引き下げることで相対的に自己を拡大させる、あるいは自己を拡大することで他者を引き下げる、間接的な方略が存在することが明らかになった。またそれらの方略の使用には性差がみとめられた。

p2-12 類似情報源下でソース・モニタリングが高齢者の記憶に及ぼす影響

| | |
|------------|-------|
| 日本福祉大学大学院 | |
| 情報・経営開発研究科 | 山岸未沙子 |
| 愛知淑徳大学 | 坂田陽子 |

高齢者は、情報源が類似した場合のソース・モニタリング能力が成人より低くなると言われている (Hashtroudi, Johnson, & Chrosniak, 1989)。したがって、このような場合にはオリジナル情報と後続情報を区別し、被暗示性効果(オリジナル記憶が後続情報に誘導されるように変容する現象)を消失させることが困難になると考えられる。幼児の研究では、類似した情報源状況で誘導情報の提示前にソース・モニタリングを行い、あらかじめ情報源を処理するという方法が提案されているが、この方法は高齢者にも利用できるかもしれない。そこで本研究では、高齢者が誘導情報提示前にソース・モニタリングを行うことによって、被暗示性効果を減少させることができるかどうかを大学生との比較を通して検討した。その結果、記憶に関する加齢の効果は認められたが、ソース・モニタリングの実施による被暗示性効果の減少は認められなかった。

p2-13 快感情の及ぼす実行機能への影響：感情誘導法に表情写真呈示を用いて

早稲田大学大学院文学研究科 井出野尚

近年、Stroop課題を題材に快感情と認知処理、特に実行機能(executive function)との関連が検討されている(Kuhl&Kazen,1999; Phillips et al,2002;井出野,2003)。本研究は、表情写真の短時間呈示による感情誘導法を用い、快感情のStroop課題(single, dual)への影響を検討することを目的とした。感情誘導に用いた、表情写真には、笑顔、悲しみ、neutralの3種類を用い、表情の模倣教示条件と模倣教示なし条件の2条件を設け、表情写真呈示と表情筋フィードバックによる感情誘導の有効性について合わせて検討を行うことを目的とした。仮説は、Stroop課題(single)では感情の影響がみられないが、Stroop課題(dual)では快感情生起時にStroop干渉量が減少する、である(Kuhl & Kazen に依拠)。結果は現在集計中のため、大会当日発表する。

p2-14 他者注目と気分における被受容感・被拒絶感

山梨英和大学 杉山 崇

抑うつに陥る過程では、抑うつ気分の持続が重要な役割を果たすが、自己と他者の関係性の認知が抑うつ的(他者に大切にされていない、または、他者にないがしろにされている)だと他者への注目や交流から気分が回復せず、抑うつ気分が持続しやすくなると仮定されている(杉山、2002)。杉山(2003)は、女子大学生を被験者とした重要他者注目操作の実験から、抑うつ的な自己-他者関係の認知を持つ場合、操作によって気分が変動しない、または否定的に傾く傾向を報告しており、仮定は支持されていた。本研究は男子大学生を被験者として、同様の手続きで重要他者注目操作の実験を施行したが、その結果、女子と異なる傾向もあるが、抑うつ的自己-他者関係認知を持つ学生の気分は操作によって肯定化せず、仮定は支持されていた。

p2-15 怒り感情による反応の願望 実行水準と日本的コミュニケーション能力との関係

法政大学 森田尚人
法政大学 福田由紀

本研究では、対人の怒り反応とコミュニケーション能力の関係について調査した。この調査の目的は、怒りの反応別に願望をもち実行する人と実行しない人のコミュニケーション能力の差の検討である。怒り反応についての調査としてAverillの怒りの日常経験を、コミュニケーション能力の測定として高井・太田のJapanese Interpersonal Competence Scaleを共に実施した。その結果、コミュニケーション能力の尺度要因として察知能力、不快隠蔽能力、上位階層交際能力、争論回避能力、曖昧寛容能力の5つが示された。それを下位尺度とし、怒り反応の願望水準・実行水準で比較を行った。(1)高察知能力群では、願望水準において怒りと反対の表現が多く、実行水準において第三者への相談が多くみられた。低察知能力群では、実行水準で怒りと反対の表現が多くみられた。(2)高不快隠蔽能力群では、願望水準において相手との冷静な話し合い、怒りと反対の表現、心を鎮めるが多くみられ、実行水準で他人への八つ当たりが多くみられた。(3)低争論回避能力群では、実行水準で身体的攻撃、言語的攻撃が多くみられた。(4)低曖昧寛容能力群では、願望水準で身体攻撃が多く見られた。これらのことは、人が怒る際に望む行動とその実行にコミュニケーション能力が関わっている可能性を示唆するものである。

p2-16 医薬品名の類似性に関する研究 薬剤師を対象とした実験の報告

立教大学文学研究科 山出康世
立教大学 芳賀 繁
東京医科歯科大学 # 土屋文人

土屋ら(2001)の開発した医薬品名の類似性指標のうち、cos1指標(医薬品名の共通文字の量による評価)・htco指標(医薬品名の先頭・末尾の共通度による評価)・edit距離指標(医薬品名の編集操作数から評価)が、実際の取り違いエラーに対してどのような影響を及ぼすのかということについて検討するために、8名の薬剤師を被験者として実験を行った。その結果、類似性指標のうちcos1指標とhtco

指標の値が高くなるにつれてエラー率も高くなるという傾向が見られ、両指標のエラーに対する予測性が確認された。これとともに、医薬品名の先頭部分の共通性や、長音・濁点・半濁点などといった特徴文字の共通性がエラーに対して影響を与えている可能性が示唆された。また、実験で使用した医薬品を知っているかどうか（既知度）は、エラーと関係がなかった。以上の結果から、医薬品名の類似性に関する問題を考察する。

p2-17 確認強迫傾向にリアリティモニタリングと確信度が及ぼす影響

広島大学 生物圏科学研究科 大谷貴重
広島大学 生物圏科学研究科 # 岩永 誠

確認強迫では、自分が行ったことと、自分が考えたことを区別するリアリティモニタリングができていないことが問題であると考えられている。McNally et al., (1993)や, Constance et al., (1995)が行なった確認強迫者のリアリティモニタリングに関する研究では、確認強迫者と健常者でリアリティモニタリングの成績に差は認められず、確認強迫者で記憶に対する確信度の低下が認められた。しかし、先行研究では実験手続きにおいて問題があり、確認強迫者と健常者のリアリティモニタリングにおける判断成績の違いについて検討できていなかった可能性が考えられる。そこで本研究では、先行研究で問題があったと考えられる刺激の感情価と教示を統制した課題を用いて、確認強迫傾向者のリアリティモニタリングについて検討する。

p2-18 身体症状の認知と症状経験時の行動の関係

二松学舎大学文学部 改田明子

不眠や腹痛などさまざまな10個の身体症状について、症状の認知と原因帰属、さらに実際の経験に関する調査を行った。被験者は149名の男女大学生である。症状の認知としては、不快感、重大性、頻度、受診傾向の4項目に関する評定を求め、原因帰属として体質、習慣、性格、異物の4項目について評定を求めた。実際の経験としては、経験の有無、経験ありの場合には、頻度、不快感、支障があったか、人に話したか、対処したか、予防しているかの6項目について質問した。調査の結果、症状を人に話し、積極的な対処・予防行動をとる群ほど、外的な帰属（異物）をする傾向があり、内的で統制不能感の高い原因（性格）に帰属する傾向が低いことが示された。

p2-19 刺激の熟知性が高齢者の二重課題遂行に及ぼす影響

愛知淑徳大学コミュニケーション学部
コミュニケーション心理学科 村井一弘
愛知淑徳大学 坂田陽子

これまで、注意分配状況下における高齢者の課題遂行に関する様々な研究が進められてきた。McDowd & Craik (1988) は、課題の困難性と複雑性を操作して、二重課題状況における高齢者の遂行を検討したが、刺激に対する熟知性は操作されていなかった。そこで、本研究では、刺激に対する熟知性の観点から二重課題や注意分配課題の加齢の影響を検討した。本研究の実験計画は、2(年齢; 高齢者、若齢者) × 2(課題状況; 単一、二重) × 2(熟知度; 高、低)であった。課題は視覚課題と聴覚課題を使用し、視覚課題のエラー率及び反応時間を記録した。エラー率に関する分析の結果、低熟知度による年齢差はなく、ほとんど誤答反応はないことが示唆された。反応時間に関する分析の結果、二重課題状況での熟知性の違いからの年齢差は見られなかった。しかし、課題状況を込みになると、熟知性が加齢に影響を及ぼしていることは確認できた。

p2-20 読書行為に対する態度の比較 - 黙読・音読・暗誦 -

法政大学文学部心理学科 福田由紀

本研究は、黙読・音読・暗誦という読書行為が、本を読むヒトにとって同じ連続線上の心理的な位置にあるとはいえないという前研究に引き続いて行なわれた。3つの読書行為についてどのような態度を

持っているかを中心に、大学生90名を被験者として検討をした。具体的には、読書行為に対する有用性、好意的態度、行為の習慣について調べた。その結果、3つの読書行為についての有用性には暗誦・音読の順、好意的態度では暗誦・音読・黙読の順で、習慣においては暗誦・音読・黙読の順で高かった。日本の大学生において、暗誦は他の読書行為に比べ、有用性・好意的な態度は低く、ほとんど習慣化されていないことがわかった。

p2-21 日常生活における情報通信機器の(再)配置のありよう

メディア教育開発センター・
総合研究大学院大学 高橋秀明
メディア教育開発センター・
総合研究大学院大学 #黒須正明

将来のコピキタス社会における通信情報機器の設計指針を開発するために、現在日常生活において、通信情報機器がどのように使用されているかを、一般家庭へ訪問し、使用実態について観察およびインタビューによって検討した。本論では、ある地方都市の一戸建てに住む1組の60代夫婦の据付電話およびテレビの配置および再配置のありようについてのみ検討した。据付電話は玄関横から台所・居間の間へ、テレビは居間内より台所に近い場所に、それぞれ再配置された。いずれも、夫妻にとってより便利な位置に再配置された訳だが、これら再配置のタイミングは、夫妻の2人の子供が独立して家を離れる時期や夫妻が携帯電話を購入した時期と重なっていること、再配置の位置は空いた子供部屋の再利用の仕方と関連していることが分かった。こうして、情報通信機器は単独で使用実態が決まるのではなく、他の家族や機器との関連で決まってくると言えよう。

p2-22 マインドシェアの新規指標の探索 - 反応時間を指標とする試み -

筑波大学心理学系 河野理恵
筑波大学心理学研究科 林美都子

マインドシェアとは、消費者の心(マインド)に占める企業、または製品イメージの占有率のことを意味する。消費者がある製品を使用し、気に入らなければ別の製品購入に移ってしまい、その製品のマインドシェアは低いとみなされる。反対にある製品に大変満足し、ずっと購入したいと考えた場合は、マインドシェアは高いとみなされる。従来、マインドシェアはカテゴリごとのブランド想起や連想の形式で測定され、その順位により、高低が明示されてきた。本研究では、マインドシェアを測定するための新しい指標として、グラデーション課題における反応時間を設定し、20~40代の男女1054名のデータを用いて、マインドシェアの新規指標として使用可能かどうかを検討した。

p2-23 受け取り動作の制御と最適動作過程の検討

東北大学大学院文学研究科 柴田 寛
東北大学大学院文学研究科 行場次朗

人間二者間の関係動作場面の一つとして物体の受け渡し場面を題材にして、手渡された円筒を受け取る動作を分析した。実験者によって手渡される円筒を受け取る実験に20人の被験者が参加した。変数として、円筒の長さ、渡す側が円筒を持つ位置、円筒の渡し方が操作された。観察された受け取り動作は「握る」「摘む」「のせる - そえる」に分類された。条件によって各受け取り動作の発現頻度が異なることから、受け渡し場面に内在するルールとして「円筒を落とさない」「渡す側の手に触れない」「渡す側の動きに合わせる」に焦点を当て、最適な受け取り動作が選択される過程が検討された。また、渡す側が動いてから受け側が動作を開始するまでの時間(T1)と、受け側が動作を開始して円筒に接触するまでの時間(T2)、およびそれらの合計時間が測定された。それらの値は受け取り動作ごとに系統的に異なっており、各受け取り動作の運動制御過程の特徴が検討された。

p2-24 児童が友人に期待する悩みの相談に対する応答

聖徳大学大学院臨床心理学研究科
法政大学

中村友香
渡辺弥生

本研究は児童が「友人関係の悩み」「勉強の悩み」の相談をした時に、どのような応答を期待するのか（期待する応答の認知）を質問紙を用いて明らかにすることを目的とした。児童が悩みを相談するときどのような言葉や表現を期待しているかという認知的側面を投影的な方法を用いて明らかにしたが、その結果、小学生では自分の行為を受け入れ、励ましてくれる「支持」的 応答や助けてくれようとする「支援」的な応答を期待していることが明らかとなった。また大学生は小学生と比較してさらに詳しいことを聞こうとする「質問」的な応答を期待していることが明らかになった。この結果から発達とともに友人に対して求める応答の認知に相違があることが示唆された。今後は、こうした期待と実際の児童行動的側面にずれがあるのかや、自分が友人の相談にのる際にどのような態度をとると認知しているなどの関係を検討することが望まれる。

5月8日(土) 15:40~17:40 ポスター3 記憶

p3-01 フラグメント完成課題における、呈示時間と処理水準効果

立命館大学大学院
文学研究科心理学専攻

佐藤文紀

フラグメント完成課題は、主にデータ駆動型潜在記憶を測定する課題とされ、処理水準効果などは出現しにくいとされてきた。しかし藤田(1992)において、フラグメント完成課題においても、問題のインターバルを操作することにより、処理型(データ駆動・概念駆動)を、実験者の側から操作することが可能であることが示された。そこで、本研究では、フラグメント完成課題においても、処理水準効果や自己参照効果が見られるかどうかを検討した。結果、フラグメントの呈示時間を3秒に設定した場合は、処理水準効果は見られなかったが、10秒に設定した場合は、処理水準効果が見られた。自己参照効果については、両条件ともに見られなかった。

p3-02 維持・精緻化リハーサル中の記憶活性化度の変化の実験的検討

中部大学人文学部

水野りか

維持・精緻化リハーサルのメカニズムの違いについては、現在でも明確かつ具体的な説明は存在しない。本研究は、両リハーサルを行っている間の記憶活性化度の変化をプライミングの手法を用いて明らかにし、そのメカニズムの違いの手掛かりを得ることを目的とした。実験では、維持リハーサル群と精緻化リハーサル群の被験者に、24個のプライム単語刺激を6秒間隔で呈示し、各々のリハーサルを行わせた。そしてプライム刺激呈示の1秒後、2秒後、4秒後(ISI)にその関連語、無関連語、非単語(種類)をターゲットとして呈示し、語彙判断時間を測定した。その結果、維持リハーサル群のターゲットの語彙判断時間にはターゲットの種類、ISIによって有意な違いは認められなかったが、精緻化リハーサル群のそれには、ターゲットの種類、ISIによって有意かつ非常に興味深い変化が認められ、両リハーサルのメカニズムの違いについての貴重な示唆が得られた。

p3-03 再認法による視空間的情報のリハーサルシステムの検討

中央大学大学院文学研究科
中央大学文学部

須藤 智
兵藤宗吉

これまで、視空間的情報のリハーサルと注意制御システムの関係は、再生法を用いた二重課題実験によって明らかにされてきた(須藤・兵藤, 2003, Smyth & Scholey, 1994 など)。しかし、再生法を用いた視空間的作動記憶課題は、空間的な性質を帯びる可能性があることが報告されている(Andrade et al, 2002)。

視空間的情報のリハーサルの性質を明らかにするためには、より視覚的情報のリハーサルに対する注意制御システムの関与を明らかにする必要がある。そこで、本研究では、再認法を用いた二重課題実験を行った。その結果一次課題（視覚パターン課題）に対する二次課題（複雑タッピング課題、単純タッピング課題、注意移動課題、コントロール）の妨害効果は認められなかった。この結果からは、注意制御システムの視空間的情報のリハーサルへの関与は、空間性領域に固有の可能性が示唆される。

p3-04 メロディの潜在記憶におけるオクターブ般化(2)

筑波大学心理学研究科

生駒 忍

生駒(2003,日心大会)は、新奇なメロディの潜在記憶においてオクターブ般化が起こることを示し、メロディの潜在記憶はもっぱらクロマ次元の情報として保持されると主張した。しかし、そこで検討されたのはオクターブ下への般化のみであった。そこで本研究では、オクターブ上への般化が潜在記憶課題において認められるかどうかを検討した。実験は基本的には生駒(2003)とほぼ同様の手続きによった。ただし、テスト段階では学習段階よりも1オクターブ高い音域で刺激が提示され、うち半数は学習段階で既提示のメロディを1オクターブ上へ移高したものであった。その結果、既提示刺激をオクターブ上げた刺激に対して学習段階での提示の効果が生じ、よってオクターブ上への般化が確認された。また、その効果量はオクターブ下への般化を検討した生駒(2003)のものと同程度であった。

p3-05 歌の音楽情報と言語情報が歌詞の検索に及ぼす影響

名古屋大学環境学研究科

社会環境学専攻心理学講座

高部由美子

名古屋大学環境学研究科

社会環境学専攻心理学講座

川口 潤

歌の言語情報と音楽情報を検索手がかりとして有名な歌の歌詞の検索を要求し、歌の表象における2つの情報の関係性について検討を行った。その結果、言語情報のみの検索手がかり(lyricprime)の有効性が最も低く、音楽情報のみの検索手がかり(musicprime)と両情報を含む手がかり(songprime)が同程度の高い有効性を持つことが示された。検索対象と同次元の情報である言語情報を含む lyricprime の優位性が見られなかったことから 歌の表象において言語と音楽情報が分離している表象ではないと考えられた。また、検索手がかりとターゲットの距離を操作することによって、歌の表象における時間的な秩序の性質の検討を行った結果、音楽情報を含む musicprime と songprime で距離の効果が見られたことから、歌の表象において音楽情報が活性化されると、時間軸に沿った逐次的な性質の検索が行われていると考えられた。

p3-06 印象の再認記憶への寄与に与える方向付け課題の効果

九州大学大学院人間環境学府

小松佐穂子

九州大学大学院人間環境学研究院

箱田裕司

本研究は、印象が再認記憶に及ぼす影響について、方向付け課題を用いてその検討を行った。先行研究では、顔を符号化する際に性格特性について判断するような方向付け課題を行うと、その後の再認成績が上昇することが報告されている。このことから、性格特性判断時に形成されている性格印象が再認成績に寄与していることが予想されるが、この性格印象が再認記憶に及ぼす影響については、これまであまり検討されていない。そこで、本研究では、印象が再認記憶に及ぼす影響について検討し、さらに、顔の符号化時に印象判断という方向付け課題を行った場合と行わなかった場合で、印象の再認記憶への寄与にどのような違いが表れるかについて検討を行った。

p3-07 再認成績に現れる数ヶ月以前の学習の繰り返し効果

岡山大学教育学部
岡山大学

勝部厚志
寺澤孝文

近年、学習の経験を思い出せないことと学習の効果が残っていないことは、必ずしも一致していないことが明らかになってきている。つまり、学習の効果は思い出せなくても残っているということが明らかになってきている。このような学習の効果は、潜在記憶と呼ばれ、現在盛んに研究が行われている。その中で寺澤(1995)は、間接再認手続きを用い、通常の再認課題の成績に数ヶ月前のわずかな繰り返しの効果が現れることを報告している。この長期的記憶現象は再認判断に潜在記憶が現れることを意味している。本研究では、この効果の信頼性を確認するために、11週間という長期のインターバルを設定し現象の検出を目指した。その結果、数ヶ月以前のわずかな繰り返しの効果が検出できた。またヒット率に注目した際に、先行研究に見られる振動パターンが見受けられることから、繰り返しの回数が多いほど成績が良くなるとは限らない結果がえられている。

p3-08 手がかり負荷が背景色文脈依存再認へおよびす影響

静岡大学情報学部
静岡県立大学短期大学部

漁田武雄
漁田俊子

ICE理論は、単純視覚文脈(CRTの背景色・前景色・提示位置など)の再認におよぼす効果について、(1)項目の熟知性と文脈の熟知性にもとづいて再認判断が行われるが、(2)項目と文脈との対経験は再認判断に影響しないと説明する。このため、hitとFAで同程度の文脈効果が生じるが、両者が相殺され、d'やCRSでは文脈効果が消失するという。実験1では、40項目を1種類の背景色のもとで提示し、2種類の背景色のもとで再認判断を行わせた。その結果、hitで文脈効果が生じたが、CRSでは文脈効果が消失した。この結果はICE理論を支持している。実験2では、36項目を8種類の背景色のもとで提示し、16種類の背景色のもとで再認判断を行わせた。その結果、hitとCRSの両方で文脈効果が生じた。この結果は、ICE理論では説明できない。これまでのICE理論を支持した実験や本実験1において、CRSやd'で文脈効果が生じなかったのは、1文脈あたりの過剰な手がかり負荷に起因するといえる。

p3-09 展望的記憶課題における無意図的想起に及ぼす個人差の影響

日本学術振興会・関西大学

森田泰介

未来において行うべき行為を記憶し、それを適切な時機に想起・実行することが求められる課題を展望的記憶課題と呼ぶ。本研究では、時間ベースの展望的記憶課題(ある時刻または一定時間の経過後に意図した行為を実行する展望的記憶課題)の保持期間における無意図的想起(想起意図がないにも関わらずふと記憶が思い出される現象)を検討対象とする。無意図的想起の頻度が時間ベースの展望的記憶課題における成績と関連しているのか、また、実行することを意図された行為の記憶表象が持つ活性化水準と関連していることがこれまで示唆されているACS(ActionControlScale;J.Kuhl,1994;宮元,1996)得点が無意図的想起頻度と相関しているのか、について検討を加えることにより、展望的記憶課題における無意図的想起がいかなる性質を有するのかを明らかにする。

p3-10 被験者実演課題(SPTs)の記憶検索時の処理に関する研究

立教大学大学院文学研究科
立教大学
富山大学

樋田航
芳賀繁
海老原直邦

本研究では、SPTs(被験者実演課題)の記憶における検索時の処理に関する研究を行う。本研究では過程分離手続きを用いて、SPTsの記憶の検索時の処理について検証した。被験者を、実演をしてもらうSPTs条件と一切実演を行わない文条件(VTs条件)の2群に分けて行為文を意図学習させた。そして両群の再認課題における記憶検索時の処理の意図的な想起の寄与率と自動的処理の寄与率が比較された。この意図学習と再認の課題において、過程分離手続きを適用することで意図的な想起と自動的処理

の寄与率を算出した。その結果、本研究では SPTs の記憶検索時の処理は文条件と比較した時に、自動的な処理の寄与率には差がみられなかったが、意図的な想起の寄与率において有意差が見られた。

p3-11 虚記憶の生起にリストの直後再生の有無が及ぼす影響

大阪樟蔭女子大学

川上正浩

虚記憶とは、ヒトが複数の項目の記銘を求められた際に、項目としては呈示されていないが、呈示された項目と意味的関連を持つ特定の単語に対して誤った再生あるいは再認がなされる現象である (Roediger&McDermott, 1995)。多くの実験研究では複数の項目からなるリストの記銘が求められ、直後に自由再生課題が課される。そして複数のリストの呈示が終わった後で最終的に課される再認課題における虚記憶の生起が問題とされる。本研究ではリストに対する自由再生課題を課さず、再認課題のみを課した場合の虚記憶の生起率を検討する。すなわち項目の記銘と再認課題実施の間に、自由再生課題を挟まないパラダイムにおいて虚記憶が生起するか否かを検討した。実験の結果、こうした状況下でも虚記憶が生起すること、また、意味的関連を持つ単語群が集中して呈示された場合にその生起率が高いことが示された。

p3-12 それは誰に言われてやったのか? : 行為の記憶に関するソース判断

北海道大学大学院文学研究科

加地雄一

北海道大学

仲真紀子

行為文を実演すると、しない場合に比べて行為文の記憶成績が優れることが知られている。本研究では、行為文に関連する文脈の記憶が、実演することによって向上するかどうかを、ソース・モニタリング (SM) 課題を用いて検討した。大学生 36 名からなる実験参加者を実演条件、想像条件、復唱条件のいずれかの学習条件に振り分けた。行為文を読み上げる声 (男声、女性) を文脈情報とし、行為文リストをランダムに男声、女声で呈示した。学習リスト呈示終了後、行為文をどちらの声で聞いたかについての SM 課題を実施した。男声に対する SM 正答率は、復唱条件が実演条件よりも有意に高かった。また SM 確信度は、想像条件が実演条件よりも有意に高かった。これらの結果から、学習項目を誰の声で聞いたかという文脈の記憶は、行為文を実演しても向上せず、むしろ言語処理やイメージ処理よりも劣る場合があることが示唆される。

p3-13 闕上・闕下呈示におけるフォールスメモリの検討

滋賀大学

田中愛子

東海女子大学

堀内 孝

本研究では、DRM パラダイムを用い、学習時のリスト語を闕下呈示することによって、フォールスメモリの生起要因が意識成分か無意識成分どちらによるものかを検討した。また、それらの関連性を検討するために ERP 指標を用いた。リスト語の呈示時間を闕上(200ms)闕下(20ms)に設定し、1 リスト 10 項目から成るリストを 25 リスト学習させた。挿入課題の後、学習したリストと未学習のリストそれぞれから CL 語と CL 語との連想関係が中央くらいの語について再認課題を行い、同時に ERP を採取した。再認課題の結果、闕上条件ではフォールスメモリが生起したが、闕下条件では生起しなかった。しかし、ERP 分析結果から、闕下条件においても闕上条件と同じ波形パターン、学習効果が得られ、闕下において CL 語の自動的な活性化拡散が生じていたことが示唆された。これらの知見により、フォールスメモリの生起要因が無意識的なものによることが示唆された。

p3-14 行為事象の記憶のソースモニタリング II

法政大学文学部

藤田哲也

行為文の内容を被験者自身が実演する SPTs 条件の方が、実演しない文条件に比べて記銘が優れるという SPT 効果について、ソースモニタリング課題を用いて検討した。実験 1 は行為文に対して実演する SPTs 条件として、実験 2 では実演無しの文条件として、行為文を偶発学習した。学習時の方向付け課題

として、深い意味的な処理と、浅い物理的な処理を被験者内で操作し、テスト時に、各行為文に対して行った方向付け課題（処理水準）についてのソース判断を求めた。その結果、ソースモニタリング正答率については、SPT 効果も処理水準効果も認められなかったが、算出した修正再認率においては、SPT 効果が認められ、処理水準効果は文条件でのみ有意傾向となった。本研究では、より詳細な学習エピソードの想起が必要なソースモニタリングと、再認記憶とでは、SPT 効果及び処理水準効果について分離が認められたが、ソース判断の対象をより多様にして検討を重ねることが重要だろう。

p3-15 False recall and presentation order of associates

University of Liege

Akira Mukai

Presentation order of associative study items (forward vs. backward) in the Deese-Roediger-McDermott paradigm was manipulated on a within-subjects basis. Eight 15-word lists in which people's names were used as critical lures were made for this experiment. The results showed that the probability of falsely recalled critical lures and the probability of veridical recall of study items were significantly lower when lists were presented in backward order. However, the summed proportions of critical lures recalled at test and critical lures produced on a post-recall test asking participants to report items that they had thought of but did not write down, indicated that the critical lures were activated equally often during the experiment both in forward and backward orders. Interpretations are offered within the activation/monitoring theory and fuzzy-trace theory.

p3-16 シーンの記憶に及ぼす事後情報の効果

神戸学院大学大学院

人間文化科学研究科

因來愛実

事後情報効果とは、ある出来事が起こった後に呈示された情報が、その出来事を目撃者の記憶に影響を及ぼすことである。この事後情報効果がどのように生じるかは、呈示される事後情報によって異なると考えられている。本研究では、この事後情報効果について、人物が中心的情報となるようなシーン画像を用いて検討した。つまり、シーン画像を人物と背景とに分け、事後情報とシーン画像の人物と背景それぞれとの関連度を操作した。その関連度の違いによって、いくつかのタイプの事後情報を作成し、どのような事後情報が、シーン画像の記憶の再認にどのような影響を及ぼすかを検討した。

p3-17 情動的ストレスが目撃記憶の情報源モニタリング能力に及ぼす影響

九州大学大学院人間環境学研究院

大沼夏子

九州大学

箱田裕司

佐賀県警

大上 涉

実際に目撃した事物と事後情報で接した事物を区別する情報源モニタリング能力に、目撃場面における情動的ストレスの有無はどのような影響を及ぼすのかを検討した。今回は情報源モニタリング判断時の基準を厳密化すると、情動的ストレスの影響のあらわれ方に違いが出るかどうか焦点を当てた。実験の結果、視覚的周辺情報において、基準を厳密化しない場合は情動的ストレスが存在する場合の方が情報源モニタリング成績が劣るのに対し、基準を厳密化すると情動的ストレスが存在しない場合の方が情報源モニタリング成績が劣ることが示された。これは目撃時の記憶処理資源配分と情報源モニタリング時の基準の厳密さが複雑に作用してもたらされた結果であると思われる。

p3-18 認知符号化法は目撃者の記憶を促進するか(2)

東京家政大学文学部

越智啓太

事件や事故などを目撃した場合、その出来事をより多く、正確に符号化するための方法について検討した。被験者に、通り魔事件を描いたスライドを提示し、(1)認知符号化法(事件を言語化する等)、(2)深い処理方略、(3)自分の好きな符号化法(統制群)の3つのいずれかの方法で符号化させ、直

後、1ヶ月後に再生、再認テストを行った。その結果、認知符号化法は、直後再生で最も大きな効果が得られることがわかった。しかし、統制群に比べて十分高い成績を示すことはできなかった。これは意図的に符号化の方法を被験者に指定することが、日常記憶の符号化にとっては逆効果になる場合があることを示している。

p3-19 感情の質と強度が記憶に及ぼす非対称性効果(1)

九州大学大学院人間環境学府
東京家政大学

野畑友恵
越智啓太

人は経験した出来事の中でどんなものを記憶していくのだろうか。それを決定する要因の一つとして感情が関わっていることは以前から指摘されている。しかし、これまでの研究を概観すると、ポジティブな出来事が記憶されやすいというポジティブ優位説、ネガティブな出来事が記憶されやすいというネガティブ優位説、ポジティブやネガティブという感情の質は関係なく、喚起された感情の強さが重要であるという覚醒度説、そして、感情の質と強度は交互作用を示すという交互作用説があり、結果の一致が見られていない。そこで、野畑・越智(2003)は、感情の質と強度が記憶に及ぼす影響について実験的に検討し、感情の質と強度は交互作用を示し、記憶に対して非対称的な効果をもつことを示した。これはこれまで重要視されていた覚醒度説を否定するものであった。そこで本研究はこの実験を追試し、この現象の頑健性について検討した。

p3-20 過程分離手続きを用いた自伝想起課題の自動的処理の検討

千葉大学自然科学研究科
千葉大学文学部

青林 唯
須藤 昇

概念的な潜在記憶は顕在記憶課題と類似した変数に影響を受けると言われている。例えば、自己記述課題を用いた自己関連付け符号化処理は概念的潜在記憶テスト、顕在記憶テストに影響する。一方で、自己関連付け符号化の中で自伝想起課題を用いた場合、顕在記憶課題には影響があるのに対し概念的潜在記憶課題には影響しない(堀内, 2002)。Mulliganはその一連の研究で概念的潜在記憶と顕在記憶に分離を起こす変数に着目し、知覚干渉効果や学習リストブロック化の効果などを実験的に検討して概念的潜在記憶における項目特定処理-関係性処理区分説を唱えた。そこで本研究では包含-除外条件設定、および一致-不一致刺激設定という2種の設定による過程分離手続きを用いて、自伝想起課題における学習リストのブロック化が及ぼす概念的な自動的影響について検討する。

p3-21 楽しい記憶に変える - 自伝的記憶のセルフコントロール -

東北大学大学院文学研究科
東北大学文学研究科

池田和浩
仁平義明

本研究では、過去のつらい思い出を楽しかったこととして語りなおすことが参加者の記憶にどう影響するかを検討した。26人の大学生が彼らの受験生活の思い出を1週ごとに4回語った。セッション1で参加者は彼ら自身の受験生活の思い出を語った。実験群の参加者は、セッション2・3で受験生活の思い出を楽しかったこととして語り、セッション4で実験の最初に語った元々の受験生活の思い出を再生した。統制群の参加者は、彼らの受験生活の思い出を1週ごとに繰り返し語った。実験の前後で、“受験生活に関する中心的概念と周辺的概念”の印象評定が行われた。各概念は予備的検討によって選定された。その結果、実験群の参加者は受験生活の中心的概念を有意にポジティブな意味合いに変化させたが、周辺の意味合いには有意な変化は生じなかった。さらに、実験群の被験者が4回目に語った自伝的記憶の内容はポジティブな方向に変容していた。

p3-22 出来事感情価が自伝的記憶の無意図的想起に与える影響

東京学芸大学
東京学芸大学

雨宮有里
関口貴裕

自伝的記憶の無意図的想起とは、思い出そうとしていないにも関わらず過去の出来事が意識に上ってくる現象である。本研究は、快い出来事と不快な出来事のどちらが無意図的に想起されやすいかを実験的に検討する事を目的とした。実験1では、被験者にダミー課題として手がかり語(快語・不快語)の印象評定をさせ、その後、印象評定中に自伝的記憶が無意図的に想起されたか否かを答えさせた。その結果、平均60%という高い想起率が得られた。出来事感情価の効果については、快い出来事の想起率の方が不快な出来事のそれに比べ高い傾向が見られたが、有意な差ではなかった。実験2では感情価と出来事の特異性の二要因計画で実験1と同様の実験を行った。その結果、特殊な出来事の想起において、快い出来事が不快な出来事より有意に想起されやすいという結果が得られた。この結果は意図的な想起に関する先行研究で得られたものと同様の結果である。

p3-23 自伝的記憶と忘却に関する研究(3)

中央大学

兵藤宗吉

大学生を対象に子供時代の出来事を想起させ、それらの経験時の感情に分類させると快・不快・中立の割合は、ほぼ50%:30%:20%になることが報告されている(Waldfoegel,1948,齋藤,1991,1992,1993,兵藤,2003a,b,c)。しかし、同様の実験でまったく異なる比率も報告されている(神谷,1993,1994,越智&太田,1995)。神谷の実験では、齋藤らの実験とは異なり、教示において「印象に残っている出来事」を想起させているので、このような結果が得られた可能性がある。よって本実験では、大学生を対象に、中学時代と高校時代の「印象に残っている出来事」を5分間、想起させ分析を行った。結果によると、高校時代に関しては、快・不快・中立の順に55.89%,27.19%,16.92%、中学時代は、47.69%、33.22%,19.09%であった。全体では、51.79%、30.21%,18.01%であり、兵藤、齋藤らの結果を支持するものであった。

p3-24 100人のモナ・リザ：記憶のコーディングのジェンダー差

東北大学文学研究科

仁平義明

男女の大学生が、レオナルド・ダ・ヴィンチによるモナ・リザの画と聖徳太子の肖像画とを記憶に基づいて描くように求められた。結果は、Nickerson & Adams(1979)の、対象の長期記憶の精緻化度は環境が要求する程度のレベルになっているという、「長期記憶の経済化仮説」を支持する実験結果を再現した。すなわち、参加者たちにとって接触頻度は高いが現実に環境が彼らに記憶をすることを求めない、肖像画の再生成績は低かった。しかし、もっと重要な結果は、再生画像として何を描き、どのような描き誤りをするかは、被験者の性に固有の特徴がみられたことであった。記憶のコーディングは、ジェンダーに依存する可能性がある。

p3-25 自伝的記憶の想起と感情制御

東京大学大学院教育学研究科

日本学術振興会

榊美知子

ネガティブ気分時にポジティブな自伝的記憶を想起すると、感情が緩和されることが示されてきた(e.g., Erber & Erber, 1994)。本研究では、「ポジティブな自伝的記憶のうち、どのような性質を持つ記憶が感情の制御に有効なのか」を検討した。67名の被験者にネガティブ気分(n=33)、ニュートラル気分(n=34)のいずれかを誘導した上で、ポジティブな自伝的記憶を5つ想起させた。また記憶想起の前後に被験者の感情状態を測定し、想起した記憶の性質が感情変化に及ぼす影響を検討した。その結果、ニュートラル・ネガティブ気分時のいずれにおいても、個人的重要度の高い記憶を想起するほど、気分がポジティブに変化することが示された。一方、自伝的記憶のポジティブ度(各記憶がポジティブな程度)は感情の変化に影響を与えなかった。こうした結果を踏まえ、感情の制御において、記憶の重要度の持つ意義について考察する。

p3-26 感性印象が再認に及ぼす影響 2種類の再認課題による比較

東北大学大学院文学研究科
東北大学

作田由衣子
行場次朗

色と図形の印象をSD法で分析し、得られた因子に基づいてポジティブな刺激(+)とネガティブな刺激(-)を組み合わせ、どのようなペアが再認容易なのか検討した。さらに、強制選択法(作田・行場, 2003)とyes-no型の再認課題の結果を比較した。その結果、強制選択法では、活動性・力量性では同極同士、特に+の形を含むペアが再認されやすい傾向にあったのに対し、評価性では対極同士、特に-の形を含むペアが再認されやすい傾向にあった。yes-no型では、活動性・力量性では-の形を含むペアの再認成績が比較的高かったのに対し、評価性では+の形を含むペアの再認成績が高かった。値を算出したところ、活動性・力量性ではほとんどのペアの判断基準が最適であったのに対し、評価性では同極のペアは厳しく、対極のペアは緩く判断していることが示された。以上のように、課題の種類によらず活動性・力量性と評価性で再認のパターンが異なることが確認された。

5月9日(日) 10:00~12:00 ポスター4 顔・言語・概念

p4-01 未知顔の再認記憶に及ぼす提示時間と呈示間隔の影響

京都光華女子大学
京都大学
立命館大学

伊藤美加
吉川左紀子
木原香代子

本研究では、顔写真を呈示する時間(呈示時間)の違いが、顔の記憶にどのような影響を及ぼすのかを、直後再認テストと1週間後の遅延再認テストとを用いて検討した。また、次の顔写真が呈示されるまでの時間(呈示間隔)の違いが、顔の記憶に影響を及ぼすのかも合わせて検討した。具体的には、実験1では呈示時間を操作し、4s・2s・500msの3水準を設けた。実験2では呈示時間と呈示間隔とを操作し(以下の条件は呈示時間・呈示間隔の順に記す)、3s-0s・1s-2s・0.5s-2.5s・2s-0.5s・2s-1sの5水準を設けた。前3条件は呈示時間と呈示間隔とを合わせて一定時間3sになるように、後2条件は提示時間を一定にし呈示間隔のみ異なるように配慮した。その結果、呈示時間は呈示間隔と独立して顔の記憶に影響を及ぼすことが示された。

p4-02 符号化時と検索時の処理の一致性が顔の再認に与える影響

大阪大学大学院人間科学研究科

高原美和

言語陰蔽効果を理論的に説明する処理シフト説は、これまでに処理を直接操作して検討されたことがない。そこで、本研究では符号化時及び検索時の処理を、フィルター処理された顔画像を用いて操作した(ハイパス画像;特徴的処理画像、ローパス画像;全体的処理画像)。そして、符号化時と検索時の処理形態の一致・不一致が顔の再認成績に及ぼす影響を検討した。その結果、全体的処理によって符号化された場合には、検索時の処理が不一致条件は一致条件より再認成績が低くなり、処理シフト説の基本的なメカニズムを支持する結果を得た。また、顔が特徴的処理によって符号化された場合には、検索時の処理が一致条件でも不一致条件でも、再認成績の間に違いは見られず、処理シフト説は当てはまらないことがわかった。さらに、顔情報の符号化時には全体的処理が優位に働くと考えられているが、検索時においても全体的処理が優位である可能性が示唆された。

p4-03 示差性が顔の全体処理に及ぼす影響

早稲田大学文学研究科

安田 孝

顔の認識では全体処理が重要なことが指摘されている。しかし、顔による全体処理の質的な側面に注目した研究、すなわち顔によって全体処理がされやすいもの、そうでないものがあるのかどうかを扱っ

た研究は、辻井(2001)などを除きほとんど検討されていない。本研究は顔の特性のうち示差性（顔の目立ちやすさ）に注目し、示差的な顔に比べ非示差的な顔は全体的に処理されている、という仮説について検討を行う。まずは示差顔及び非示差顔を「人ごみの中で見つけやすい顔」というこの分野で慣習的に用いられる教示により、男女それぞれで示差顔・非示差顔を8枚ずつ、合計32枚を選出した。次に選出した顔写真を用いて全体処理の差異の検討を行った。ここでは、顔の全体性を示した頑健な実験パラダイムである整列効果を用いた記憶再認実験による検討を行った。再認成績と反応時間の分析により、顔の全体性の差異に顔の示差性が及ぼす影響について議論する。

p4-04 顔面表情の表出と認知に関する実験的研究

| | |
|----------|------|
| 立命館大学文学部 | 二塚亜実 |
| 立命館大学 | 尾田政臣 |

顔面表情の表出には、表出者ならびに認知者の年齢や性別、社会的スキル特性や文化差などさまざまな要因が影響を及ぼしていると考えられる。そこで本研究では、被験者に第三者に与えたい印象数種類を指示し表情を作ってもらい、動的な顔面表情の表出に表情表出者の記号化スキル（ACT）ならびに性別が及ぼす効果を検討した。その結果、記号化スキルの高い者であっても、必ずしも自分の顔面表情の程度について自信があるわけではないこと、男女間で作りやすいと感じている表情、よく作る表情が異なっており、よく作る表情であればあるほど、表情表出者はその表情を作りやすいと感じていることが示唆された。また、表情解読実験の結果、表情表出者の記号化スキルの高さは必ずしもその表出が解読する者にも伝わりやすいとはいえないこと、表情表出者が作りやすいと感じる表情、よく作る表情は、実際に解読する者にもより伝わりやすいことが示唆された。

p4-05 顔ロボットC Gの印象特性に関する検討

| | |
|----------------------|----------------|
| 東北大学大学院文学研究科・日本学術振興会 | |
| ATR HIS | 伊師華江 |
| ATR HIS | 蒲池みゆき |
| ATR HIS | # Harold Hill |
| ATR HIS | # Marcia Riley |

近年、人との関わりをもって活動する知的ロボットは、そのコミュニケーション機能が重視され、豊かな表現を状況適応的に用いることが求められている。認知心理学がロボット科学に寄与できる一つの可能性として、限られた特徴変化自由度をもつ顔ロボットの印象特性を探り、その制約の中で効果的な表現を実現するための方法論を確立することがあげられる。これにより将来的に、人間が受ける特定の印象を意識しながら、顔に最適なパラメータ変化を付加することも可能になるであろう。本研究では、ヒューマノイドロボットのもつ操作可能な物理特徴のうち、頭、眉、口の三つのパラメータを操作したロボット顔C Gを用いて、SD法による印象因子の抽出と定量化を試みた。今回の解析では特に、印象変化に関わる顔特徴変化、および提示法の違い（静止画・動画）について検討した。

p4-06 正立・倒立顔における表情認知構造のフラクタル次元の定量的差異

| | |
|--------------|--------|
| 北星学園大学社会福祉学部 | 竹原卓真 |
| 帝塚山大学 | # 落合史生 |
| 産業技術総合研究所 | # 渡邊 洋 |
| 同志社大学 | # 鈴木直人 |

表情認知構造は「快 - 不快」、「覚醒度」の2次元平面上におおよそ円環状で存在していることがRussellらによって見出され、その後Takeharaらによってその認知構造が小数次元のフラクタル次元によって定義付けられることが見出された。Takeharaらは人間がさらに複雑な表情を認知する際には高いフラクタル次元で対応していると考え、より複雑な認知処理が必要な倒立表情や粗子化した表情を刺激として用いたところ、認知構造のフラクタル次元が増加することを見出した。しかし、残念ながら彼らは定量的

な次元の差を検証するにいたらなかった。そこで本研究では倒立顔条件における認知構造のフラクタル次元は正立顔条件よりも高くなると仮定し、両条件間で次元の差を定量的に検証した。その結果、予測どおり倒立顔条件のフラクタル次元は正立顔条件よりも有意に高いことが判明した。

p4-07 事象関連電位を用いた曖昧表情の意味判断過程の検討

| | |
|--------------|--------|
| 日本大学大学院文学研究科 | 小川直子 |
| 日本大学大学院文学研究科 | 鈴木竜太 |
| 日本大学文理学部 | # 山田 寛 |

顔の意味処理過程について事象関連電位(Event-related potentials; ERP)を用いた検討が進められている。鈴木ら(2001)の典型表情図形と標準図形の表情弁別課題を行わせた研究では、図形間の意味空間距離の差異が P300 成分に反映されている可能性が示唆された。しかし彼らの課題で提示された表情図形は各情動カテゴリにつき 1 種類ずつでしかなく、現れた電位差が表情の意味判断までを反映しているかは明確ではない。そこで本研究では、同一カテゴリについて複数の顔写真を用意して、鈴木らと同様の実験を繰り返した。これによって、より明確に表情の意味処理を反映する ERP を観測できるものと考えられる。具体的な刺激群には喜び、怒りの 2 種類の表情写真とそのどちらとも判断しうる曖昧な表情写真を 3 枚ずつ設定した。また統制刺激には顔以外の物体図形を用いた。これらをランダムな順序で提示し、表情の種類の弁別判断時に生じた ERP 成分について意味処理が反映されているかどうかを検討した。

p4-08 表情認知過程におけるカテゴリ判断段階に関する検討

| | |
|--------------|--------|
| 日本大学大学院文学研究科 | 渡邊伸行 |
| 日本大学大学院文学研究科 | 鈴木竜太 |
| 日本大学大学院文学研究科 | # 山口拓人 |
| 日本大学文理学部 | # 山田 寛 |

表情認知過程に関する情報処理モデル(山田, 2000)によると、我々が相手の顔から表情を判断する際、(1) 視覚情報の抽出、(2) 感情的意味評価、(3) カテゴリ判断、の 3 つの過程を経るとされている。本研究はこの第 3 段階であるカテゴリ判断段階に関する検討を実施した。実験材料として喜び、驚き、悲しみ、怒りの 4 つの基本表情を表す線画図形と、それぞれの組み合わせで 19 枚ずつ作成した中間表情を用いた。実験では線画とカテゴリ語を継時的に提示し、強制二肢判断実験を実施した。そして表情の物理的な変化とカテゴリ判断頻度および反応時間の関係について検討した。

p4-09 再認前の言語化が示差性の異なる顔の記憶に及ぼす影響

| | |
|---------------|-------|
| 島根大学法文学部 | 北神慎司 |
| 京都大学大学院教育学研究科 | 吉川左紀子 |

再認前の言語化が、顔の記憶に妨害的に働くことを言語陰蔽効果(verbal overshadowing effect)というが、これまでの研究では、学習刺激やテスト条件によっては、逆に、促進的に働くことが示されている。本研究では、言語化のしやすさと関連があると考えられる顔の示差性を操作し、さらに、テストセットでは、合成変数を連続的に変化させたディストラクタ群(複数のカリカチュア、アンチカリカチュア)を用意することで、再認前の言語化が、示差性の異なる顔の記憶にどのような影響を及ぼすかを検討した。その結果、ヒット率の分析においては、示差性効果がみられたと同時に、示差性の高い顔に対してのみ、言語化が顔の再認に促進的に働く可能性が示唆された。また、ディストラクタの選択については、全体的に、カリカチュア寄りの刺激が選択される傾向が示された。

p4-10 仮名語の認知における表記の妥当性の効果 - 語彙判断課題による検討 -

科学技術振興機構 / 日本大学
日本大学
臼井信男
巖島行雄

表記の妥当性とは、ある単語を表記する場合に、漢字、片仮名、平仮名のいずれの表記が妥当であるかに関する主観的特性値であり、表記の妥当性を低下させると反応時間などの単語認知のパフォーマンスが悪くなることが知られている。本報告ではこのような表記の妥当性の効果が、単語の全体的形態(語形)の処理に起因するという可能性について、語彙判断課題を用いて検討した。単語がある特定の表記で頻繁に認知処理された結果、語形処理が可能になるとすると、単語親密度が高い単語では、親密度が低い単語に比べて、語形処理が行われる確率が高いと考えられる。そこで単語親密度と表記の妥当性の二つの要因を変化させて実験を行ったところ、いずれの要因も有意な効果があるが、交互作用は認められなかった。高親密度語と低親密度語で表記効果の大きさが変化しないという本実験結果は、この現象を語形処理によって説明することが困難であることを示唆している。

p4-11 比喩の処理過程における文脈情報の役割: 2種類の新奇比喩の比較

立命館大学文学研究科
中原 誠

比較理論や領域写像理論など、比喩(メタファー)の処理過程を説明する従来の諸モデルでは、喩えられる語(目標領域)と喩える語(基底領域)との2領域間の関係性のみに着眼され、その背景にある文脈情報は単なる付加情報として取り扱われる傾向があった。しかし、発信者による生成、受信者による理解という対話的伝達過程を考慮に入れると、比喩の処理過程における文脈情報の関与は大きく、類似する2領域の共有属性を選択しその類似度の大きさを決定する第3領域としての役割を持っていると想定される。しかも、その関与性は、慣用化されていない新奇な比喩を理解する過程においてこそ大きいと考えられる。本研究では、生成課題を通じて慣用比喩から拡張されたものと独創的なものとの2種類の新奇比喩を準備し、それらと慣用比喩を比較することにより、比喩における文脈情報の類似度や理解度への影響を検討する実験を行ない、その役割を考察する。

p4-12 語彙の意味評価性に及ぼす音象徴効果 - ストループ課題による検証

関西大学大学院社会学研究科
関西大学
水谷聡秀
雨宮俊彦

人は、語彙の意味を音声で判断するとき、その判断に音声の非言語情報が影響する。語彙に備わる肯定否定といった評価の意味判断は、声質に影響される。音象徴がその判断に影響を与えることも考えられ、本研究では、音象徴によるストループ課題でその仮説を検証する。まず、名詞や形容詞などの複数の語彙に対して、肯定否定といった評価の評定と、熟知度評定を行った。また、仮名1字の音を思い浮かべさせ、それに対して、明るさの評定を行い、語彙の明るさの度合いを音象徴の側面で求めた。熟知度の高い刺激語を選定し、意味評価要因(肯定・否定)×音象徴要因(肯定・否定)で音声による評価ストループ課題を行ったが、全体的には音象徴要因による効果を確認できなかった。しかしながら、単語によっては効果があり、とくに漢語には音象徴の効果を示唆される。

p4-13 文字学習における「空書」の効果

名古屋大学大学院
教育発達科学研究科
名古屋大学大学院
教育発達科学研究科
丸山真名美
木村 純

本研究の目的は、文字を学習する際に、実際に書かなくても書字運動を行うだけで十分であるか否かを検討することであった。記銘文字として、中国簡体字とタイ文字を用いた。記銘方略として、実際に紙に書く「書き取り」、机の上に指で書く「紙上空書」、空中に指で書く「空中空書」、手指を動かさずに学習文字を見て覚える「視覚提示」の4つを設けた。学習文字は被験者内要因、記銘方略は被験者間要因

因であった。各記銘方略に大学生 10 名が参加した。記銘方略と学習文字による平均正答数に差があるかを検討するために学習条件×学習文字の 2 要因分散分析を行った。その結果、学習文字の主効果のみが有意であった($F(1,36)=13.43, p<.01$)。下位検定を行ったところ、「視覚提示」においてタイ文字の正答率が低いことが示された。文字を学習する際に実際に書き取り練習をする必要はないといえる。

p4-14 アナロジー生成における整合性探索過程

清泉女子大学

福田 健

問題解決においてアナロジーの自発的生成・活用が困難であることは様々な文脈の課題で確認されてきた。しかしながら、我々がアナロジーを積極的に用いようとする場面、とりわけ、解決方法を知らない問題を解決方法を知っている問題に準える明示的な目標、または、他者にとって解釈困難な状況を解釈容易な状況に準えて説明する明示的な目標が与えられた場面などでは、極めて容易かつ柔軟にそれを行うことができることも示されている(Dunbar, 2000 他)。本研究は、そうした豊かなアナロジー生成力が発揮される条件下では、どのような過程でアナロジーが検索され検証されるのかを、言語プロトコルから分析したものである。特に、アナロジー生成の目標カテゴリ(説明か記述か)、説明の要求水準、などによって、生成と照合の過程がどのように影響をうけるのか、について検討した。

p4-15 日常における自然数の大小比較の認知過程

筑波大学

島田英昭

複数桁数の即時的な大小比較(たとえば、1234 と 5678 の比較)では、上位から 2 桁目までの数が同時に大小比較に用いられることが明らかになっている(島田, 2003, 認心発表)。本研究は、日常場面において上記の研究知見が一般化可能であるかを検討した。実験では、ある仕事をした際の報酬の遅延時間を 2 種設定し、各時間における 4 桁数の報酬額を提示する報酬選択の場面を想定し、報酬選択の判断を 5 件法により求めた(たとえば、直後に受け取る 5123 円と 1 ヶ月後に受け取る 8678 円)。その結果、上位から 2 桁目の適合性効果(最上位桁と n 桁目の方向の操作、たとえば、51** と 86** は適合、56** と 81** は不適合、この 2 条件の評価の差が適合性効果)が、3,4 桁目の適合性効果よりも大きく、3,4 桁目には変化がなかった。したがって、比較が上位 2 桁に限定されるとする即時的な比較の知見が、日常における報酬比較の場面にも一般化可能であることが示された。

p4-16 事物間の関係性と事物のまとまりの判断との関係

慶應義塾大学社会学研究科

南雲美帆

慶應義塾大学

伊東裕司

事象間の時間・空間的共有による関係による主題的分類と比べて分類学的分類は認知的負荷を軽減すると考えられている。そのため成人は主題的分類よりも分類学的分類を選好すると考えられてきた。しかし成人も主題的分類を積極的にやっていることが近年の研究で示されている。本研究では、成人を対象にプライム刺激として分類学的関係あるいは主題的關係による単語対を示し、ターゲット刺激として提示したそれぞれの関係による単語対がまとまるか否かを判断させた。その結果、プライム刺激とターゲット刺激の単語間関係性が不一致の場合に比べ一致していた場合の方が、ターゲット刺激をまとまっていると判断するまでの時間が短いことが示された。しかし分類学的関係に比べると主題的關係の方が反応時間の差は小さかった。この結果から、成人において分類学的関係のみならず、主題的關係も概念における凝集という機能に有効に作用している傾向が示唆される。

p4-17 英語学習者による単語のイメージ性評定と偶発学習

神戸市立高専

西山正秋

メンタルレキシコンについて実証的に研究する際、一般的には母語話者の評定から得られたリストが用いられるが、外国語としての学習者にそのままは適用できない。日本人学習者による英語語彙の評定尺度はまだ多くはないが、最近のグループ研究で「英単語親密度調査」が約 800 名の学生を対象として

行われた。その中の親密度が高い語と、既存の英語データベースから適語を選定し、記憶・学習との関係が深い「イメージ性」について調べた。イギリス MRC(MedicalResearchCenter)のデータベースからイメージ性の上位語・下位語を各 25 語選び、40 名の学生を対象に評定と直後の自由再生を求めた。その結果、(1)イメージ性の上位群と下位群で有意な差があったが、下位群では単語によるばらつきが見られた。(2)自由再生で見られる偶発学習には、各単語の諸属性(親密度、イメージ性、具象性 etc.)との関連が見られた。

p4-18 連想課題を用いた概念地図作成法の効果の検討

桜花学園大学大学院 杉浦詩帆
桜花学園大学大学院 皆川 順

Novak,J.D. & Gowin,D.B.によって提唱された概念地図法は、皆川(2000)の一連の実験において、比較的短時間では概念地図を描かせることがテスト得点向上に結びつかないことが明らかにされている。しかし、評価方法を変えることでわずかな伸びをみることができると考え、本研究では「概念地図作成を学習手段とし短時間で作成させた場合には、説明文のみの学習方法の方が事後テストによって優れた成績になるであろう」として「概念間の階層的関係理解においては、概念地図作成を学習手段とし、概念及び概念間の関係をより明確に学習した被験者ほど、より近い階層水準への連想強度が増すであろう」という仮説を立て、実験的に検証した。その結果、仮説 1 では先行研究を支持する結果が得られ、仮説 2 では、3 項目中 2 項目で有意差がみられ、概念地図作成が、概念間の階層的関係の促進に効果的であることが示唆できる結果となった。

p4-19 事前のプランの形成が行為のスリップに与える影響

嵯山女学園大学 廣瀬直哉

本研究の目的は、事前のプランの形成が微小な行為のスリップであるマイクロスリップに対して与える影響について検討することである。これまでの研究においても事前にプランを立てることでマイクロスリップが減少することが確認されているが(廣瀬,2003),課題状況を見ながらプランを立てる課題であったため、実行の順序のプランを立てることと課題状況を視覚的に把握することの分離されていなかった。そこで、本研究では、(1)事前にプランを立てない、(2)課題状況を見ながらプランを立てる、(3)課題状況を見ずに材料のリストだけをみてプランを立てる、の 3 つの条件を設定して実験を行い、事前のプランの形成の効果に関して詳細な検討をおこなった。

p4-20 偽 MHD における選択の偏好

筑波大学心理学研究科 三好一英
筑波大学人間総合科学研究科 若林真衣子
筑波大学心理学研究科 生駒 忍

モンティホールジレンマ(Monty Hall Dilemma :MHD)においては、ホストからの事後情報の提示を受けて選択を変更する場合の当選確率は 2/3、選択を変更しない場合の当選確率は 1/3 となる。そのため、確率的に有利な戦略は選択を変更することである。しかし、文化によらずほとんどの人々はドアを変更しない傾向にあることが知られており、それは日本人においても同様である。人々が問題構造をどのように捉えているのかを検討すべく、本研究では MHD 日本版を改変し、事後情報の提示を受けた後にどちらのドアを選択しても当選確率が 1/2 となる「偽 MHD 課題」を作成、実施した。その結果、MHD 日本版同様にドアを変更しない傾向がみられた。

p4-21 認知的意思決定モデルとしてのディフュージョンカウンタ・モデル

早稲田大学 上田卓司

カテゴリー化や分類をはじめとする認知的意思決定に要する反応時間を予測・説明するための枠組みは、従来多く提唱されてきた。こうした試みの中心をなすのが逐次抽出モデルと呼ばれる、確率過程論

に依拠したモデルであり、なかでもディフュージョン・モデルならびにポワソン・カウンタ・モデルの二種が詳しく比較検討されている。今回の発表において筆者は、両種のモデルの特性をあわせ持つ、ディフュージョンカウンタ・モデルを提唱し、その特性や反応時間データへ当てはめるための要件等を検討した。数値的特性やモデルのパラメータと想定する認知過程との対応、といった分類課題モデルとしてこのモデルを活用する際に求められるいくつかの点を中心に考察を行った。いくつかの難点はあるが、反応時間を説明するためのモデルの候補足り得る、という結果を得た。また、経験的に他のモデルとの比較を行うための研究方略についても言及した。

P4-22 自由回答は誘導尋問にひっきりやすい? - 被暗示性尺度の再検討

畿央大学健康科学部

金敷大之

本研究の目的は、人が自由回答条件下において記憶判断をした場合、出力制御できずにかえって質問文に誘導されやすいことを検証することであった。本研究は仲(1998)の被暗示性尺度を用い、約30分の遅延の後に、質問文に基づいて1回だけ記憶判断を被験者に求めるものであった。その際に、彼女の作成した“そういう内容はなかった”、“覚えていない”といった選択肢を含む親切な回答用紙に記入する群(回答用紙群)、各質問に対して自由回答を行う群(自由回答群)とに被験者を分けた。仲(1998)の作成した回答用紙に基づいて反応パターンを分析したところ、回答用紙群に比べて自由回答群では誘導尋問にひっかかる数が多かった。1問あたりの制限時間要因などがかわっているが、自由回答条件下では、“そういう内容はなかった”、“覚えていない”という正当な出力反応が妨害されているといえる。